

CAMPUS MASTER PLAN 2025



琉球大学キャンパスマスタープラン 2025 Ver1.0

～交流が生まれにぎわいを感じるキャンパスを目指して～



1章 キャンパスマスタープランについて 2

1-1 キャンパスマスタープランとは？.....	2
1-2 キャンパスマスタープランの位置付け.....	3
1-3 キャンパスマスタープランの実施体制.....	4
1-4 基本方針.....	5
1-5 キャンパスの50年後のイメージ.....	6
1-6 国の施策.....	8

2章 各キャンパスについて 10

2-1 キャンパスのこれまでの経緯.....	10
2-2 キャンパスの現状.....	11
2-3 問題点と課題設定.....	21

3章 整備計画 22

3-1 整備方針.....	22
3-2 将来計画.....	25

4章 施設マネジメント 36

4-1 施設マネジメントの考え方.....	36
-----------------------	----

5章 個別計画 39

5-1 老朽改善計画.....	39
5-2 インフラ整備計画.....	40
5-3 省エネ計画.....	41
5-4 交通計画.....	42
5-5 デザイン計画.....	43
5-6 ユニバーサルデザイン計画.....	44
5-7 緑化計画.....	44
5-8 サイン計画.....	45
5-9 事業継続計画（BCP）.....	45

はじめに



琉球大学長
喜納 育江

琉球大学は、多くの沖縄県民と海外の県系人らの熱意と関係者の尽力により、1950年に戦火で灰燼に帰した首里城の跡地に開学しました。開学当初より地域社会への貢献を基礎に据え、戦争によって荒廃した社会の復興を担い、新しい地域社会を支える人材を数多く輩出してきました。設置形態やキャンパスの場所など、本学の姿もそれぞれの時代の状況の中で変化し続けていますが、地域に貢献する大学としての姿勢は堅持してきました。

本学は、首里キャンパスから西原町への移転後、2004年度に「キャンパスリファイン計画」を策定しました。これを2009年度にステージⅡ、2016年度にステージⅢへと改定し、それぞれの計画にもとづいてキャンパス整備を進めてきました。しかしながら、移転から40年が経ち、老朽化する施設の維持と同時に、建物の改修を順次学部ごとに進めることとなりました。そこで、西田睦前学長のリーダーシップのもと、キャンパス整備を一連の改修の数十年後を見据えた次のステージへと前進させるべく、リファイン計画という名称を「琉球大学キャンパスマスタープラン2025」と改め、夢のある未来のキャンパスをイメージできるような計画へと刷新しました。

「キャンパスマスタープラン2025」の完成は、本学にとって節目となる創立100周年の2050年を目標としていますが、その計画は30・31頁に示されています。6・7頁にはこれをさらに整備した50年後の千原キャンパスのイメージ図が掲載されていますが、このイメージ図は、本学工学部で建築を学ぶ学生が中心となり作成したものです。本マスタープランのキーワードとなるのが、前学長の提唱した「交流が生まれ、にぎわいを感じるキャンパス」ですが、教職員だけでなく未来を担う学生の声も反映しつつ検討を進めることで、学生が生き生きとキャンパスライフを送り、教職員が心地よく過ごせる空間を創出したいと考えています。

こうしたビジョンのもと、まず「キャンパスマスタープラン2025」完了予定の2050年までには、イノベーションが生まれる人との出会いや交流、すなわち「にぎわい」を生むメカニズムとなる「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」を実現し、地域社会とも活発な「交流の場」を共創することを目指しています。

本学は、長期ビジョンである「地域とともに豊かな未来社会をデザインする大学」の体現をめざして、これから本学はこのマスタープランに基づいてキャンパスの整備を行い、地域の皆さまはもちろんのこと、国内各地、世界各地の方々からも「訪れてみたい」と思われるキャンパスを創造していきます。

本マスタープランは、策定後も折々的に見直し、更新していく予定です。本マスタープランへのご要望やご意見があれば、ぜひお聞かせください。創意工夫と魅力にあふれるキャンパスの創造に向けて、これからも皆さまから温かいご支援とご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

1 章 キャンパスマスタープランについて

1-1 キャンパスマスタープランとは？

■大学の重要な資産である土地の利用計画、施設の整備計画を定めたもの

本学では、これまで、施設の整備計画として「キャンパスリファイン計画」を策定し、必要に応じて改定してきました。しかしながら、千原キャンパスへの移転後約 40 年が経過し、現状の施設を維持することだけでなく、さらに 40 年後の改築等も見据えた将来のキャンパスの在り方を描く必要性が出てきました。

これを踏まえ、現状のキャンパスの課題を整理するとともに社会情勢の変化も参照しつつ、50 年後のキャンパスのイメージを描くこととしました。また、50 年後までの中間地点として、25 年後の計画を施設整備の長期計画として検討しました。これに施設マネジメントの考え方、老朽改善計画などの各個別計画を加えて新たにキャンパスマスタープランとして策定することとしました。

■学長のリーダーシップのもとに策定され、すべての整備が本計画に基づいて実施される

土地及び建物は大学の所有する資産の大部分を占め、これらをどのように活用・整備していくかについては、大学の経営判断として行う必要があります。キャンパスマスタープランはその土地の利用計画を含み施設の整備計画を定めるものです。

よって、キャンパスマスタープランは学長のリーダーシップのもとに策定され、本学の土地利用、施設整備はすべて本計画に基づいて実施されます。

■社会情勢の変化や国の施策の動向を反映するため、概ね中期目標期間ごとに改定する

コロナ禍や経済の動向、少子高齢化などの社会情勢や SDG s や GX、働き方改革などの新たな政策等により大学に求められる役割は変化していくものであり、変化のスピードも増えています。大学の土地利用や施設整備の在り方においても、こうした変化への柔軟な対応が求められることから本計画も概ね中期目標期間ごとに改定します。



1-2 キャンパスマスタープランの位置づけ

キャンパスマスタープランは、本学の目標であるアカデミックプランを踏まえ、施設や空間環境、工作物等において具現化していくために作られるものです。また、本計画は整備の規制等を行うものではなく、将来的に立案される構想や取組を実現していくための一助となるものです。

■アカデミックプラン

基本理念、琉球大学憲章	1) 琉球大学の基本理念 2) 琉球大学憲章
長期ビジョン	2050 年の琉球大学の姿（長期ビジョン） 1) 地域とともに豊かな未来社会をデザインする大学 2) アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点となる大学
中期将来ビジョン	長期ビジョンに掲げたミッションを実現するための 2030 年を見据えた 34 の将来ビジョン
基本的な目標	中期将来ビジョンに基づいた 「教育」「研究」「地域連携」「国際連携」「医療」「大学運営」の 6 つの取組目標

アカデミックプランを踏まえ、キャンパスマスタープランを作成
(施設や空間環境、工作物に具現化)

■キャンパスマスタープラン（全体像）

基本方針	琉球大学の将来像 「交流が生まれにぎわいを感じるキャンパス」
キャンパスの 50 年後のイメージ	時間的スケールによる変化の大きさを考慮し、 千原キャンパスの 50 年後をイメージ
整備方針	1) 共創拠点化の推進（防災拠点） 2) RX（琉大版 DX）の推進 3) 省エネルギーのさらなる推進
将来計画	整備方針を踏まえた千原キャンパスの 25 年後の具体的な計画
アクションプラン	将来計画を実現していくために 6 年間で 優先的に実施すべきこと

将来像を実現していくための 3 つのマネジメント

施設 マ ネ ジ メ ン ト	スペースマネジメント	活用度の低いスペースは、イノベーションスペースなど、 大学としてより有効な使い方にシフトしていく
	クオリティマネジメント	大学として最適な施設整備の品質を保証し、 それを基準とした施設整備を行う
	コストマネジメント	徹底して無駄を省き、これによって捻出した財源は真に必要な施設 整備に充てる。また、新たな補助金の獲得や民間資金の活用など、 幅広い視野で多様な財源の確保に努める

1-3 キャンパスマスタープランの実施体制

キャンパスマスタープランは学長のリーダーシップにより全学的に計画を立案し、それに基づき整備を実施していくことでアカデミックプランの実現に寄与します。また、計画のとおり実施されているのかを自己点検評価し、国の施策や大学の取組、社会情勢等の変化を踏まえ適宜見直し、更新していく必要があることから、以下のとおり実施体制を構築します。

■キャンパスマスタープランの実施体制（PDCAサイクル）



1-4 基本方針

琉球大学憲章や基本理念、長期ビジョン、中期将来ビジョン、基本的な目標、SDGs の取組等を踏まえ、キャンパスマスタープランを策定する上での考え方の基礎となるものとして基本方針を検討しました。

学長や役員の方々との意見交換を実施し、本学の大きな課題として「にぎわいを感じづらい」ことが挙げられたことも受け、本学キャンパスの目指すべき姿を、「交流が生まれにぎわいを感じるキャンパス」とし、さらに「教育」「研究」「地域連携」「国際連携」「医療」「大学運営」の6つの観点からそれぞれの方針を定めました。



■教育

「主体的にイノベーション（価値）を生み出す力」と、地域や地球規模での新たな課題に対して、「果敢に挑戦する力」を持った人材を育成するキャンパス

■研究

ダイバーシティを尊重した協働により、創造的活動を生み出し続けるキャンパス

■地域連携・国際連携

多様な連携を通じて多様な力を結集し、大学資源を拡大するとともに、それらを基盤として教育研究力をローカル・グローバルに展開するキャンパス

■医療

沖縄健康医療拠点として、県民の健康維持・増進、先端医療の開発と提供の基盤となるキャンパス

■大学運営

大学の効率的な経営に資するため、資産を最大限活用するキャンパス

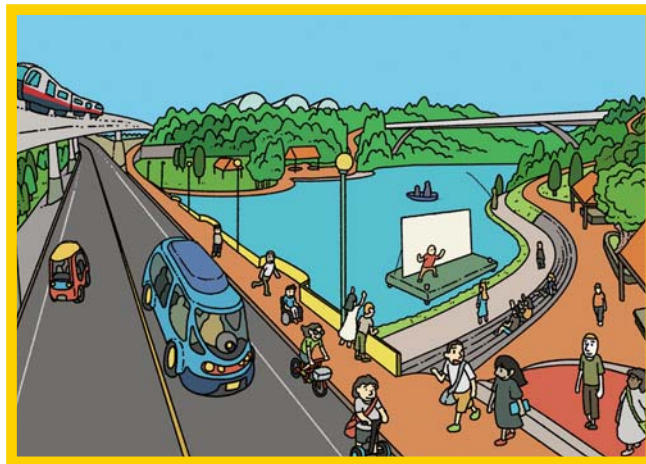
1-5 キャンパスの50年後のイメージ

今から約40年前、本学キャンパスは当時開発されたばかりの千原に移転されました。当時の姿は未だ樹木も育っておらず、現在の生き茂った力強い緑とは全く印象が異なるものです。40年という時間スケールがこれほどのものだという事を認識させられます。今後のキャンパスの在り方を検討する上では、こうした変化の大きさも考慮して目指すべきビジョンをイメージしておくことも重要と考えました。

そこで本計画では、主要キャンパスである千原キャンパスの50年後のイメージを検討し目指すべき姿として描くこととしました。今まさに多くの建物が築後約40年を迎え、さらに50年先はこれら建物が築後90年を超えることから、建て替え時期に至ると考えています。それらを踏まえ、基本方針にある「交流が生まれにぎわいを感じるキャンパス」となるよう現状の建物配置に囚われず、様々な方が、様々な目的を持って訪れるような夢のある将来像としました。

【植物や生物の保全エリア】

植物や動物に関する教育・研究活動の場、絶滅危惧種等の生物を保全するなどをイメージしています。



【千原池を活かした水辺エリア】

千原池周辺で水辺を活かしたアクティビティを楽しんだり、一人の時間を過ごしたりと屋外パブリックとは毛色の異なる場をイメージしています。



【大学の機能が集約化した中心的なエリア】

建物の中心の屋外パブリックをイメージし、沖縄の文化等に触れたり、交流を促したりする場をイメージしています。

【大学の機能が集約化した建物内イメージ】

50年後は学部の隔たりがなく、様々な分野がマッチングし教育研究活動等が実施されていると想像しています。建物内では4棟が連なり、共に創造していく活動の場をイメージして描いています。



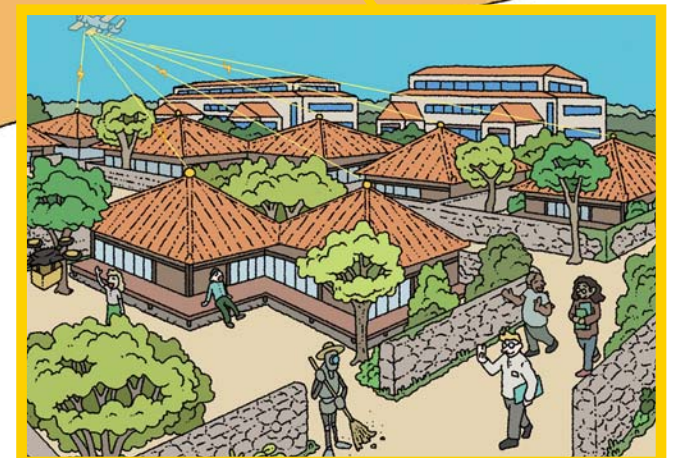
【シンボリックな建物エリア】

大学の講堂などキャンパスの象徴となるような建物をイメージしています。



【外国人研究者や留学生向けの宿舎エリア】

今後の人口減少に伴い、海外から多くの研究者や留学生が訪れることイメージしています。



1-6 国の施策

キャンパスマスタープラン策定に当たっては社会情勢の変化や国の施策の動向を注視し、計画に適切に反映していく必要があります。キャンパスの在り方や施設整備計画に関係の深い施策等について、近年のものを中心に列記しました。将来的には新たな施策も出てくることから広い視野を持って常に情報収集することも重要です。

■科学技術・イノベーション基本計画（R3.3.26）

地方創生のハブを担うべき大学では、地域産業を支える社会人の受入れの拡大、最新の知識・技術の活用や異分野との人材のマッチングによるイノベーションの創出、地域産業における生産性向上の支援、若手研究者が経験を積むことができるポストの確保・環境整備といった取組を進め、これにより、地域や企業から投資を呼び込み、地域と大学の発展につなげるエコシステムの形成を図る。また、複数の国公私立大学や研究所で連携するような活動を進める。(p.63)

国立大学法人等の施設については、キャンパス全体が有機的に連携し、あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレイヤーが共創できる拠点「イノベーション・コモンズ」の実現を目指す。こうした視点も盛り込んで国が国立大学法人等の全体の施設整備計画を策定し、継続的な支援を行うとともに、国立大学法人等が自ら行う戦略的な施設整備や施設マネジメント等も通じて、計画的・重点的な施設整備を進める。(p.65)



■これからの時代の地域における大学の在り方について ー地方の活性化と地域の中核となる大学の実現ー (R3.12 中央教育審議会大学分科会)

大学は、ポストコロナ／ウィズコロナ社会において、社会課題解決につながる産学官連携によるオープンイノベーションを促進し、様々なステークホルダーが関与しながら地域の将来ビジョンに基づいたバックキャスト型の研究開発を行うための拠点ともなる。そのためには、大学マネジメント人材の育成・確保や、大学施設等の整備・充実が必要である。

特にイノベーション創出の基盤となる大学施設等については、大学キャンパス全体を多様なステークホルダーが関わり合い新たな価値を生み出す「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」として整備し機能を強化していくことも重要である。(p.11)



■経済財政運営と改革の基本方針（骨太方針）2024（R6.6.21 内閣府）

官民共同の仕組み等による大 型研究施設の戦略的な整備・活用・高度化の推進 226 や研究DXによる生産性向上、若手研究者の処遇向上や、女性研究者、研究開発マネジメント人材の活躍促進、産学官連携によるキャンパスの共創拠点化、大学病院における教育・研究・診療機能の質の担保に向けた医師の働き方改革の推進等を図る。(p.48)



■第5次国立大学法人等施設整備5か年計画（R3.3.31 文部科学省）



■「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」の実現に向けて (R4.10 文部科学省)



■我が国の未来の成長を見据えた 「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」の更なる展開に向けて (R5.10 文部科学省)



■教育振興基本計画（R5.6.16 文部科学省）



■国土強靱化基本計画（R5.7.28）



2章 各キャンパスについて

2-1 キャンパスのこれまでの経緯

1950年代

■1950年 那覇市首里に琉球大学が開学

首里キャンパスに琉球列島米国民政府の管轄下で開学し、琉球大学本館及び木造8棟（普通教室）、図書館が落成しました。

■1954年 国頭村に与那キャンパスを設置

琉球列島米国民政府が国頭村にある与那演習林の無期限無償の使用権を認可し、農家政学部が与那キャンパスを利用することになりました。

1960年代

■1966年 琉球政府立大学への移行

琉球大学設置法及び琉球大学管理法により、琉球政府立大学となりました。

■1966年 那覇市与儀の那覇病院を改築

那覇市与儀の那覇病院を教育病院として改築し、新那覇病院となりました。

■1967年 風樹館(初代)が落成

那覇市の首里キャンパスに故金城キク女史寄贈による建物が落成しました。

1970年代

■1970年 琉球大学附属病院への移行

■1971年 本部町に瀬底キャンパスを設置 西表島に西表キャンパスを設置

■1972年 国立大学への移行、附属病院の竣工

■1975年 西原町千原への移転整備工事開始

農学部附属農場造成工事の着工をもって西原町の千原キャンパスへの移転整備工事を開始。

■1979年 医学部の設置

1980年代

■1984年 教育学部附属小中学校の設置

■1985年 千原・上原キャンパスへの移転完了

1980年代

■2004年 国立大学の法人化、風樹館(2代目)落成

■2004年 キャンパスリファイン計画策定

■2009年 キャンパスリファイン計画ステージⅡ改定

■2016年 キャンパスリファイン計画ステージⅢ改定

■2019年 大規模改修事業開始

■2025年 琉球大学病院および医学部の移転完了

■2025年 キャンパスマスタープラン2025Ver1.0 策定



1950年 開学当初の首里キャンパス



1950年 琉球大学本館



1967年 風樹館(初代)



1972年 附属病院(那覇)



1980年 千原・上原キャンパス全景

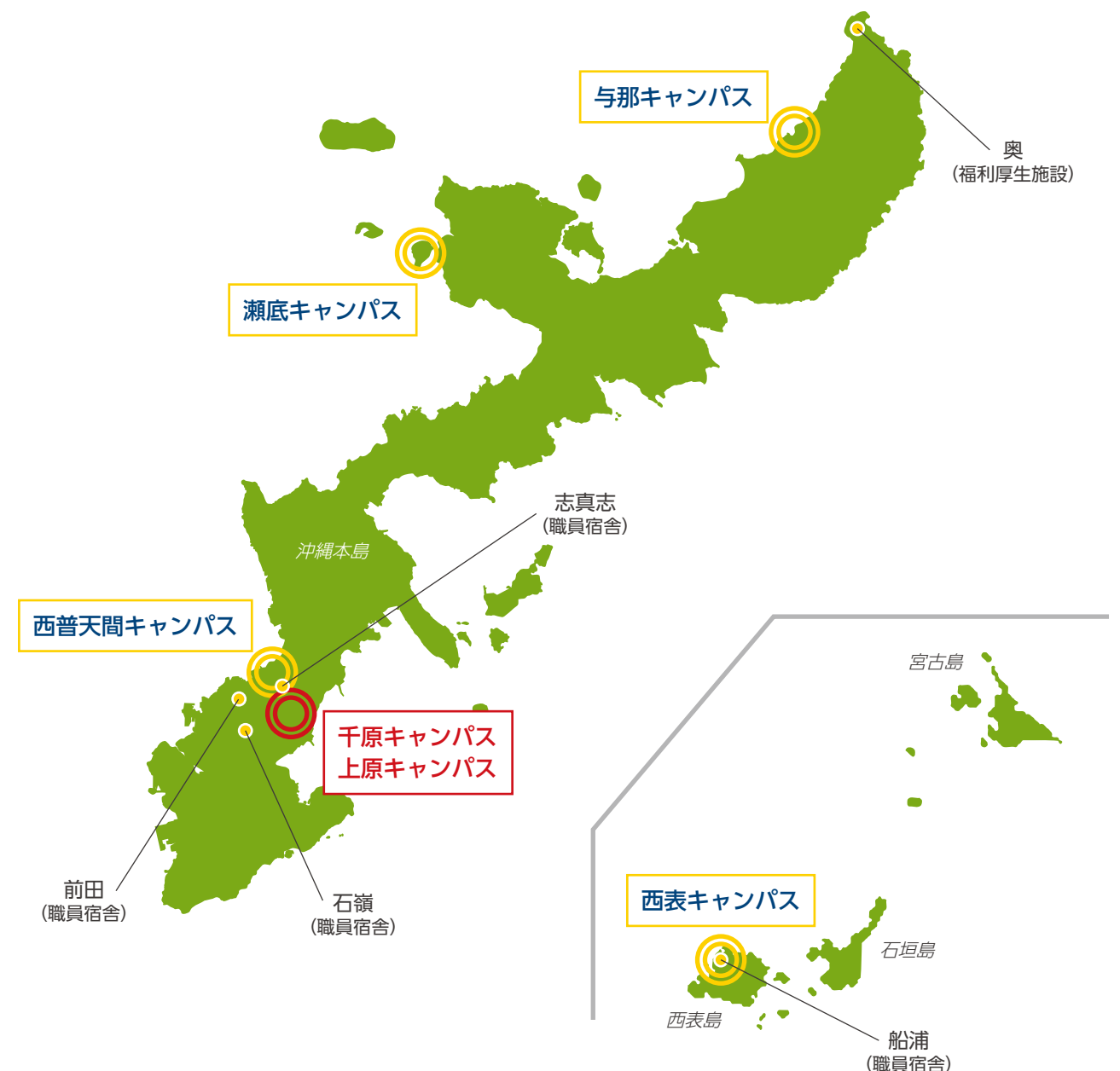
2-2 キャンパスの現状

本項では今後の施設整備計画立案のための前提条件としてキャンパスの現状を整理します。また、現状とあるべき将来像とのギャップがすなわち解決すべき問題となります。

■キャンパス概要

本学の主要キャンパスは、千原および西普天間キャンパスであり、その他に上原キャンパス、瀬底キャンパス、与那キャンパス、西表キャンパスを保有しています。

本学が保有する敷地面積は「約167ha」であり、国立大学86法人中26番目の大きさの敷地を保有しています。また、建物面積は「42.3万㎡」で国立大学86法人中17番目の規模を有しています。



■千原キャンパス

1950年に首里城跡地に開学された後、1979年より千原キャンパスへの移転を開始。農学部、工学部、理学部、国際地域創造学部、人文社会学部、教育学部その他、千原フィールド（農場）や附属小中学校、学生寄宿舍等もキャンパス内に設置されています。

千原キャンパスは、広大な敷地を有し、緑豊かで自然に恵まれた情緒溢れる校風です。キャンパスの敷地面積は「約103ha」であり、建物面積は「約19.3万㎡」を有しています。



画像 ©2024 Google, Airbus、画像 ©2024 Airbus, CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com、地図データ ©2024

■西普天間キャンパス

2019年より移転整備事業を開始。2025年1月に琉球大学病院が開院し、2025年4月1日の医学部の開学をもって移転が完了しています。

本キャンパスは宜野湾市との連携強化により、大学の知見を活かした市民の健康増進の施策の検討を進め、大学病院周辺を便利で楽しく運動ができる「ウォーカブルな街」として整備しています。



■上原キャンパス（2025年西普天間へ移転）

大学病院のある上原キャンパス（西原町）については1985年に与儀キャンパス（那覇市）より移転。米軍キャンプ瑞慶覧（西普天間住宅地区）の返還に伴う「沖縄健康医療拠点構想」により2024年度末に西普天間キャンパスへの移転が完了しています。キャンパスの敷地面積は「約23ha」であり、建物面積は「約9.8万㎡」を有しています。



画像 ©2024 Google, Airbus、画像 ©2024 Airbus, CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com、地図データ ©2024

■瀬底キャンパス

1971年に理工学部附属臨海実験所（現熱帯生物圏研究センター・瀬底研究施設）として設置され、2010年には文部科学大臣により国立大学共同利用・共同研究拠点（熱帯生物圏における先端的環境生命科学共同研究拠点）に認定されています。

キャンパスの敷地面積は「約2.6ha」であり、建物面積は「約0.6万㎡」を有しています。



■与那キャンパス

与那演習林及び里山研究園から構成され、昭和 29 年（1954 年）に米国民政府財産管理官より無償無期限での使用権（与那演習林）が許可されたことに始まります。

その後、昭和 40 年（1965 年）には旧奥中学校の敷地が当時の国頭地区教育委員会より寄付されました。なお、与那演習林については、沖縄の本土復帰に伴い、昭和 48 年（1973 年）から沖縄県と借地契約を締結し、現在に至っています。

キャンパスの敷地面積は「約 0.9ha」であり、建物面積は「約 0.2 万㎡」を有しています。



画像 ©2024 Google, Airbus、画像 ©2024 Airbus, CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com、地図データ ©2024

■西表キャンパス

昭和 46 年（1971 年）に琉球大学農学部附属熱帯農学研究施設（現 熱帯生物圏研究センターの前身）として開設され、平成 6 年（1994 年）に全国共同利用施設となり、国内外の研究者に広く利用されています。

キャンパスの敷地面積は「約 20ha」であり、建物面積は「約 0.3 万㎡」を有しています。



■千原キャンパス 現状写真

【プロムナード／首里の杜】

図書館前プロムナードは、多くの学生が行き交う千原キャンパスのメインストリートであり、ベンチや東屋が配置されているが、現状通行のための利用にとどまっており、昼食時以外に賑わいを感じる事ができない。

図書館横には、千原キャンパス移転完了を記念し首里キャンパスにあった樹木等を移設した「首里の杜」と呼ばれる緑地空間があり、千原キャンパス中心部における自然の豊かさに寄与している。



図書館前プロムナード



大学会館側 プロムナード



大学会館側 プロムナード



首里の杜 昼食時

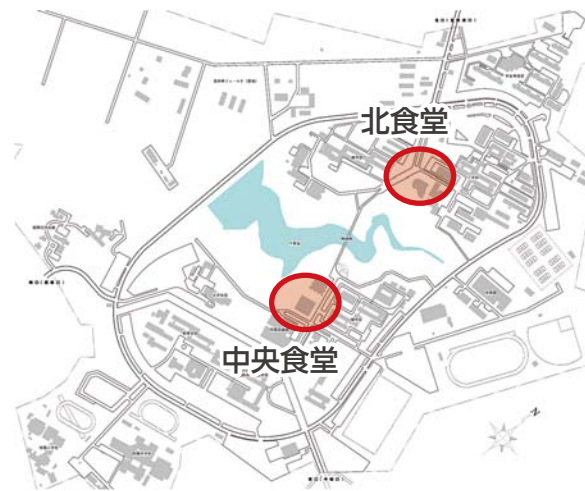


共通教育前プロムナード 昼食時

【中央食堂／北食堂】

千原キャンパス内の食堂は、キャンパス南側（理学部や文系の学部、図書館、大学本部等）の「中央食堂」と、キャンパス北側（工学部や農学部、学生寄宿舍等）の「北食堂」の2箇所ある。

昼食時、中央食堂は長蛇の列となる程の混雑も見られるが、北食堂は比較的空いている。両食堂とも、千原池に面したテラス席が用意されているが、樹木が生い茂っており、良好な景観を遮っている。また、什器類や屋根材の腐食等も見られる。



【風樹館（博物館）】

イリオモテヤマネコやヤンバルクイナ等の希少生の剥製をはじめ、首里城関連の考古資料、民族資料など主に琉球列島で収集した約17万点の標本や資料を展示した、大変見応えのある博物館。

建物は、沖縄を代表する建築家の金城信吉が生前最後に設計した印象的な煉瓦造りとなっており、琉球大学の中で最も意匠性が高い。しかしながら、キャンパス内の奥まった位置にあるため、来学者から認識しづらく、また老朽化による外壁レンガの剥落・雨漏れ等、広報面や老朽化に伴う安全面の課題もある。

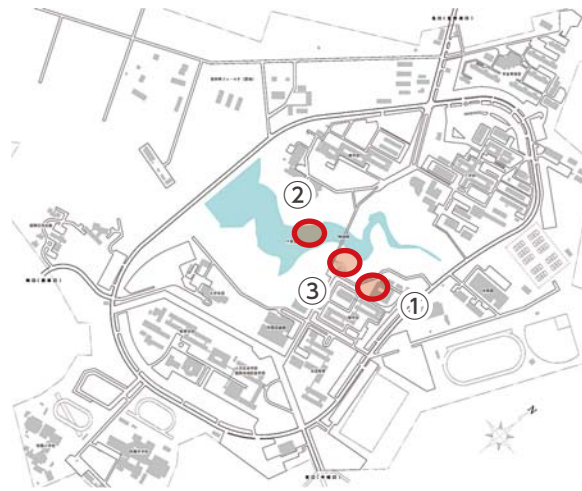


【千原池 / 球陽橋】

大学が千原に移転してきた 1977 年に作られた人工の調整池。膝下程度の浅い所から、深い所では約 12m の水深となる。

ここでは、原池の原水を利用した雨水利用システムを設置し、年間約 18 万 5 千 m³ の水を、農場の灌漑用水として有効活用している。

キャンパスの南北を繋ぐ球陽橋は、1984 年に架設された方杖ラーメン橋。橋長 85m、幅員 3m の人道橋で、平成 30 年に耐震補強工事が完了している。



①千原池の全景



②千原池からの景観



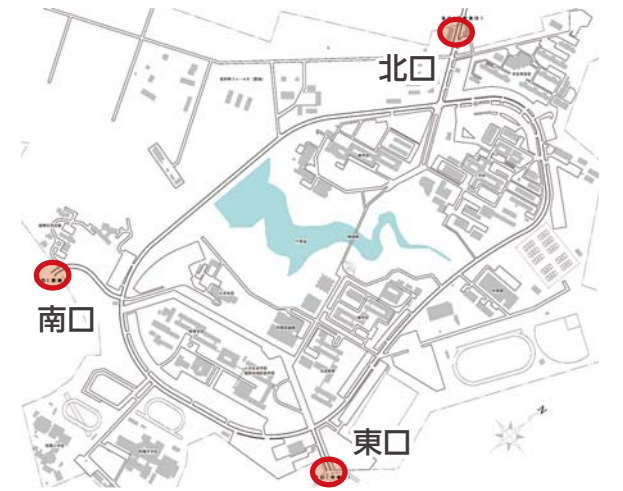
③屋外ステージからの景観

【キャンパス入口（南口・北口・東口）】

千原キャンパスは、西原町、宜野湾市、中城村の 3 市町村にまたがる広大なキャンパスであり、それぞれ南口（西原口）、北口（宜野湾口）、東口（中城口）の 3 つの入口を有するが、いずれも琉球大学のメインエントランスという扱いではない。

北口付近には、路線バスのターミナルを有し、また高速道路のバス停にも近接しているため、利用者が多い。

大学利用者以外の一般地域住民の通行も多く見られるため、朝夕ピーク時には周辺道路の交通渋滞を誘発している。



南口（西原口）



北口（宜野湾口）



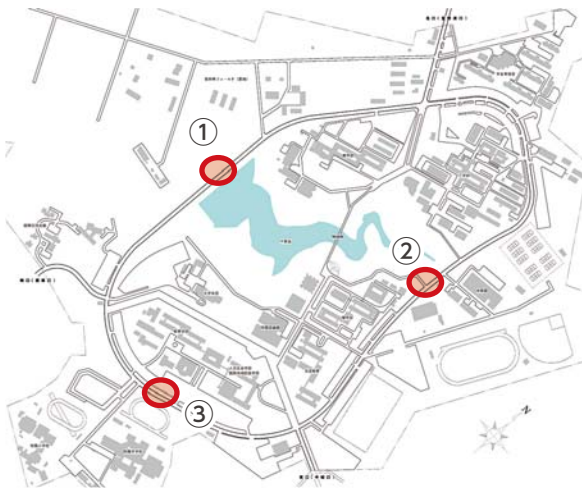
東口（中城口）

【ループ道路】

周長約2.4kmの千原団地内の周回道路。幅員約8m(片道1車線)、信号機6箇所、バス停1箇所を有する。

ループ道路の内側に各学部校舎や図書館、食堂、大学本部等、外側に運動場等の体育施設や附属学校、農場、学生寄宿舍等が配置されている。

起伏があり、歩道部分はランニングコースとしても利用されているが、老朽化等により道路が陥没している箇所もある。



2-3 問題点と課題設定

1-3 で定める基本方針や 1-4 のような国の施策、2-1 で示したキャンパスの現状等を踏まえ、現状のキャンパスの問題点を列記しました。また、ここで挙げた問題点に対応して本学が取り組むべき課題も設定しています。さらに、問題点と課題は基本方針の中の5つの観点で整理しました。(医療については、現時点で移転間近の状況であるため、問題点は挙げていません。)

これら課題が解決されていくよう、計画、実施、評価、フィードバックというPDCAサイクルを回していくことが重要です。

※太字はキャンパスリファイン計画において示された問題点で、現状においても改善までは至っていないことから改めて記載している。

	問題点	課 題
教 育	敷地面積が大きく、千原池により分断されている。	新たな交通計画の立案により建物間の移動をスムーズにする。(自動運転車、シェアサイクル、循環バスなど)
	コミュニケーションスペースが小さい。	コミュニケーションスペースを計画的に配置していく。(共創の場)
	にぎわいを感じられる場が少ない。	にぎわいが生まれる場の配置や動線計画を立案する。
	公共交通の利用が少ない。	公共交通利用の促進や、公共交通の利便性を向上させる施策を実行する。
	記憶に残るような印象的な場所が少ない。	外部資金の活用などによる新営建物の建設を計画する。
	外部の交流スペースが少ない。	建物外部にも魅力的な場を整備する。
	建物名称サインが統一されていないなど、建物の場所が分かりづらい。	サイン計画を改定する。
	施設の老朽化が進んでいる。	老朽改善計画を策定し、計画的な老朽改善整備を実施する。
	バリアフリーでない部分がある。	バリアフリー計画を策定し、計画的に改善していく。
研 究	学部ごとに固まった建物配置のため、学部横断的な交流が生まれにくい。	共創の場を計画的に配置する。
	プロジェクトスペースが不足している。	大規模改修に併せ、スペースを集約、再配分し、プロジェクトスペースを確保する。
	湿度が高いことにより室内で結露が発生する。	亜熱帯気候に配慮した施設整備を実施する。
地域連携	耐荷重や耐薬品性能など、建物の性能として先進の実験、研究に対応していない部分がある。	適切な標準仕様を策定し、これに基づいた整備を実施する。
	リスクリングなど地域の人材育成に資するスペースが少ない。	キャンパスマスタープランに基づいた施設整備の実施。
	高齢者や子供など多様な人々への配慮が不足している。	バリアフリー計画を策定し、計画的に改善していく。
国際連携	英語表記など日本語以外のサインが十分整備されていない。	サイン計画を策定し、計画的に整備していく。
	多様な人種や宗教への対応が不十分。	バリアフリー計画を策定し、計画的に改善していく。
	留学生や外国人研究者と日本人学生の交流が少ない。	キャンパスマスタープランに基づいた施設整備の実施。
大学運営	施設整備のための財源が不足している。	国費の確保、多様な財源の確保に務める。
	施設利用者の建物専有意識が強く、資産の有効活用に支障が出ている部分がある。	学長のリーダーシップのもとにキャンパスマスタープランを策定するなど、丁寧な啓蒙を実施する。
	キャンパス入り口から駐車場までなど、サインが不足している。	サイン計画を策定し、計画的整備していく。
	樹木が繁茂し、外灯を遮っている部分、サインや信号が見づらい部分がある。	緑化計画を策定し、計画的整備していく。
	省エネの推進が遅れている。	環境に配慮した施設整備を計画的に実施していく。

3章 整備計画

3-1 整備方針

本学の取組や社会情勢、国の施策等を鑑み、施設整備に係る次の3つの取組事項を整備方針としました。なお、個別の施設整備の実施方法や計画立案については4章および5章で示しています。

すべての施設整備は、本方針に基づいて実施されるものとしますが、本学の取組や社会情勢、国の施策の変化により適宜追加や見直しを行うものとします。

3-1-1 共創拠点化の推進

■共通教育棟を軸とした「共創拠点化」の推進

文部科学省において、第5次国立大学法人等施設整備5か年計画（令和3～7年度）を令和3年3月に策定し、施設整備の方向性としてキャンパス全体をイノベーション・コモンズ（共創拠点）へ転換していくことを掲げています。その中では「知と人材の集積拠点としての特性を最大限発揮し、市民、行政、教育研究機関、企業・金融機関・NPO等、社会の様々なステークホルダーとの連携により創造活動を展開する「共創」の拠点となることが期待されています。

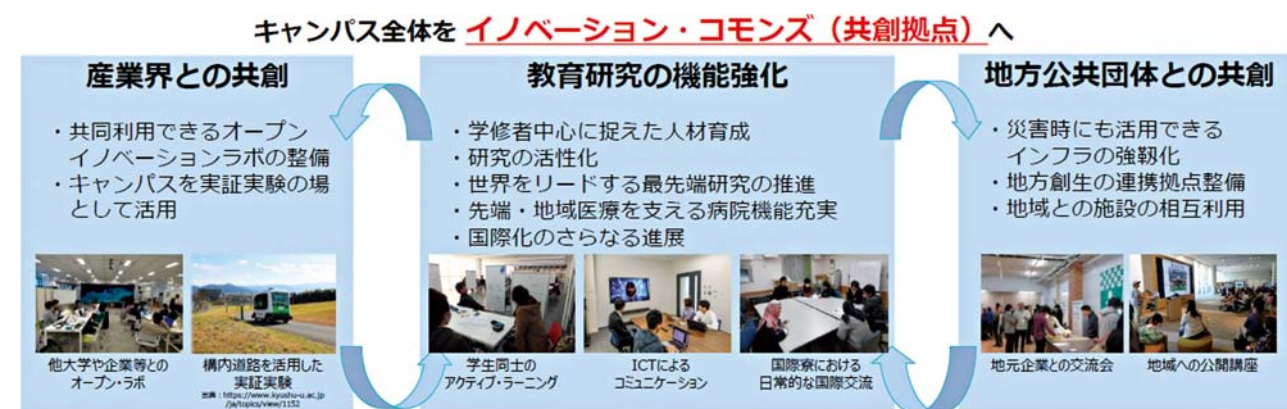
沖縄県内外においては、今後18歳人口の減少が進んでいくなかで学生も減少し、それに伴って教職員が減っていくことが予想されています。これまでと同様に学生、教職員だけのキャンパス利用に留まっていると、減少を見据えて施設の規模を見直していくなど、減築を前提として考えていかなければなりません。

そのため、本学では共通教育棟を共創拠点化に実現への軸として据え、学生、教職員のみならず様々なステークホルダーが集うことで、交流が生まれにぎわいを感じられるキャンパスを目指します。

また、自然災害に伴う一時避難先等として、キャンパスの重要性が増していることから、今後は防災拠点としてのキャンパス整備についても検討します。

そのうえで、未活用スペース等の把握に努め、保有面積の最適化を進めていきます。

なお、新たな建物の建設（改築を除く）については、たとえイニシャルコスト（寄付金による整備など）が発生しない整備であっても、ランニングコストを十分に考慮し、慎重に検討する必要があります。



【参考】文部科学省 第5次国立大学法人等施設整備5か年計画（令和3～7年度）より】

3-1-2 RX（琉大版DX）の推進

琉球大学は、業務のデジタル化や組織・活動の改革の取組を強めつつ沖縄ならではの特色を付加し、ポストコロナの新しい大学の姿を見据えて、本学の再構築することを目指す「琉大トランスフォーメーション」（以下「RX」という。）推進プロジェクトを立ち上げることとしました。また、2022年8月16日には「RX推進宣言」を発出しました。



本学は現在、農学部を起点として大規模改修事業を進めています。今後も引き続き機能強化を目的とした整備を進めていく予定としていますが、これを機会にRXの取組を踏まえハードに落とし込んでいくことで、さらにRXが推進していくものと考えています。

ただし、ハードに落とし込んでいくためには、「どの程度の業務改善が見込まれるのか？」などということとを定量的に分析し、ランニングコストも含め効果を検証していく必要があります。

また、学内外を問わず、使う側のニーズを把握し、「それを満たす整備は何なのか？」ということにより深く考えて整備していくことも重要です。

なお、本学のRXの取り組みについては、以下の5つの分野に分けられています。

■業務・運営 RX

諸手続のペーパーレス化やサービス向上を図るための身近な業務のデジタル化、さらには学生証・職員証のデジタル化により、これまで手作業で行っていた業務のデジタル化に取り組む環境を整えます。

■教育・学生支援 RX

コロナ対応の経験を踏まえ、対面授業と遠隔授業・オンデマンド授業のベストミックスを図りつつ、学習者本位の教育の促進と学びの室の向上を図るためのICTツールの適切な活用を推進します。

■研究 RX

研究の高度化促進のための機器管理棟の自動化の推進や、研究データマネジメント体制整備や研究データマッチングを推進します。

■地域貢献・国際交流 RX

デジタル人材の育成など、時代のニーズに合ったリカレント教育、社会人教育、青少年教育を推進します。

■医療 RX

健康医療DXの推進により地域医療への一層の貢献を目指します。

3-1-3 省エネルギーの更なる推進

■ゼロカーボンに向けた取り組みの3つの柱

本学は沖縄県において多くのエネルギーを使用している数少ない事業所です。そのため、本学が積極的に省エネルギーの取り組みを推進していくことで、国、地域が目指す将来像の実現に一役を担うと考えています。

沖縄県による「第2次地球温暖化対策実行計画」では、2050年度の長期目標として脱炭素社会を目指すこととしており、2030年度の中期目標を「温室効果ガス排出量の26%削減（2013年度比）」としています。また、「沖縄県グリーンエネルギー・イニシアティブ~2050年度の脱炭素社会の実現に向けて~」においては、2050年度の将来像として「エネルギーの脱炭素化」、2030年度の将来像として「低炭素で災害に強い、沖縄らしい島しょ型エネルギー社会」を掲げています。

本学ではそれらを参考に「琉球大学カーボンニュートラル実施計画」を令和6年2月に策定しました。この計画では、2023年度から2030年度までの期間を対象としており、「温室効果ガス排出量の30%削減（2013年度比）」を中期目標として掲げ、整備計画を示しています。

現在は2050年度のゼロカーボンまでの長期的なロードマップの作成に向け準備を進めており、ワークショップ等により着想を得て、取組の柱となる3つを検討しました。



【参考_ワークショップでの意見やそれらによる着想を得た3つの柱】

上記を踏まえ、大規模改修等においてはZEB化を図るとともに、日々進歩する先端技術を取り入れるなど、常に更なる省エネルギーの可能性を模索し、その成果を見える化していきます。

また、各自治体及び企業等と連携し、GX関連補助金等を活用して創エネを推進するとともに、それら取組を通じて土地などの資産も有効的に活用していくことで持続性のあるものとします。

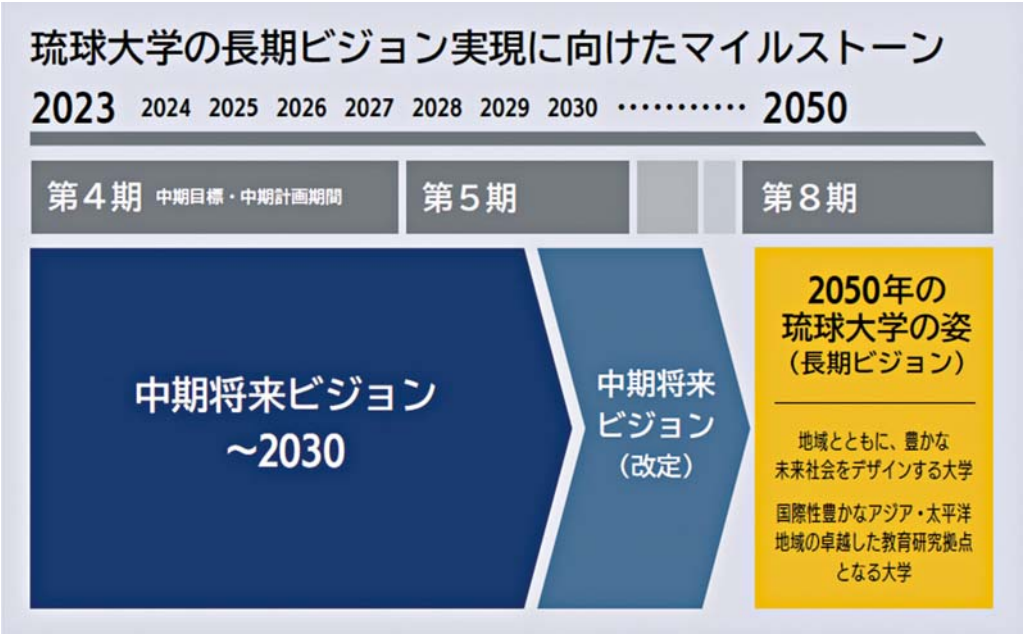
3-2 将来計画 ~25年後（2050年）の琉球大学キャンパス~

本学キャンパスの目指すべきビジョンである「1章 1-4 50年後のイメージ」に対し、より現実的な施設整備計画の基礎となるものとして、50年後までの中間地点である25年後（2050年）の将来計画を検討しました。

■将来計画における重点取組事項

25年後は本学が100周年を迎えます。「2050年の琉球大学の姿（長期ビジョン）」では、地域とともに豊かな未来社会をデザインし、アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点を目指す本学の将来像が描かれています。さらに、長期ビジョンを実現していくために、2030年を見据えた「中期将来ビジョン」を明確にしており、次期中期将来ビジョンでは「高等教育のグランドデザイン」も視野に入れた改定も見据えています。

これらビジョン実現に向けた大きな契機となることとして「共創拠点化」が挙げられます。そのため、2050年の琉球大学キャンパスにおいては「共創拠点化」を重点取組事項としました。



【参考_琉球大学の長期ビジョン実現に向けたマイルストーン】
（琉球大学統合報告書2023より）

■ Part1 教育

沖縄には、島嶼地域の多様な自然環境・固有の文化・島相互あるいは周辺諸国・地域との関わり歴史があります。琉球大学は、これらの地域特性を活かしながら、学修者本位の教育を行います。

1. 地域、日本、世界の課題を見据えた教育
2. 多様な人的交流の場を通じた人間性の成長
3. 国際性あふれた教育環境の充実
4. カリキュラムおよび教育方法の不断の改善による教育の質の向上
5. 感染症の流行を含む様々な社会情勢の変化に対応する新たな教育方法の導入
6. 高大連携等の推進
7. 教育の機会均等の促進
8. 豊かな感性と知性、地域へのまなざしを持った児童および生徒の育成

■ Part2 研究

基礎的かつ普遍的な人類共通の課題と、沖縄に特徴的な島嶼、海洋、亜熱帯、医学および歴史・文化を含む社会的な課題の研究に取り組み、それらの成果を積極的に発信します。また、琉球大学に蓄積されている多くの知見に基づき、斬新な研究を推進します。

9. 基礎研究および地域の特色を活かした研究の推進
10. 地域の緊急課題および固有課題に関する研究の推進
11. 学内研究推進体制の整備と強化
12. 学外の研究機関・企業等との連携
13. 地域固有の課題解決力の強化
14. 沖縄における産業振興への貢献
15. 地域が目指すべき将来ビジョンの検討への貢献
16. 社会の人々への学びの機会の提供
17. 地域等とのネットワークの強化

■ Part3 地域連携

琉球大学は、長期ビジョンの中で「地域とともに豊かな未来社会をデザインする大学」を掲げています。琉球大学がもつ智慧と知識を活かし、地域の総合的な発展に貢献します。

21. 沖縄県内の人々の健康増進
22. 新たな感染症や亜熱帯域固有の疾病への取組
23. 地域医療への使命感をもった医療従事者の育成
24. 競争力のある医療産業の振興
25. 国際性・離島の特性を踏まえた沖縄健康医療拠点の創生

■ Part4 国際連携

琉球大学は、沖縄の特色ある地理的条件と歴史的経緯から得た智慧を活かし、多様な国際的協働関係を通じて、アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点となることを目指します。

18. アジアを中心とした国際連携の強化
19. 外国人留学生の育成と支援
20. 多様性にあふれる平和なキャンパスの創造

■ Part5 医療

沖縄県には、亜熱帯域に位置する島嶼であるがゆえに特有の医療課題があります。琉球大学は、こうした地域特性を踏まえて先端的医療を推進します。

21. 沖縄県内の人々の健康増進
22. 新たな感染症や亜熱帯域固有の疾病への取組
23. 地域医療への使命感をもった医療従事者の育成
24. 競争力のある医療産業の振興
25. 国際性・離島の特性を踏まえた沖縄健康医療拠点の創生

■ Part6 大学運営

本学のビジョンを実現していくためには適切な大学の運営が求められます。琉球大学は、構成員が協力し合いながら、学生にとっては学びがいきなり、教職員にとっては働きがいがあり、地域にとっては頼りがいのある大学を目指します。

26. 学長を中心とした機動的な経営体制による安定的で透明性の高い大学運営
27. 健全かつ安定的な財務基盤の確立
28. 教職員の資質・能力および大学運営意識の向上
29. 教職員の協働の推進
30. 差別やハラスメントのない職場の実現
31. コンプライアンスの遵守と危機管理体制の強化
32. 新たな働き方による職場環境の改善
33. キャンパスのデジタル化の推進
34. 豊かな自然との共生

【参考_中期将来ビジョン（2030年）を構成する6パート34ビジョン】
（琉球大学統合報告書2023より）

■共創拠点化に向けたアクションプラン（6年間でやるべきこと）

では、本学が2050年に「共創拠点化」を実現するためにはどうすればよいのか？です。

本学が所有する施設はその多くが築後40年程度であり、現存する施設について大規模改修工事を実施し、さらに40年間使い続けるという状況です。また、新たな建物を矢継ぎ早に建設していくことも想定されていません。このことから、25年後の共創拠点化に向けた6年間でやるべきアクションプランとして次の2つを実施していくことを目標としました。

① スペースの再配置や集約化による共通教育棟の再生

今後、共通教育棟にて予定されている大規模改修においては、共創拠点化実現への契機として捉え、当該建物をイノベーション拠点として再生させます。共通教育棟の再生計画にあたっては、経年40年以上の教育研究施設かつ、延床面積が1,500㎡を超え、令和3年3月31日時点で老朽改善整備が未完了である建物を対象として、対象面積(61,674㎡)の11%(約7,000㎡)を共創の場として確保することを目標とします。

- ※1 文部科学省は「第5次国立大学法人等施設整備5か年計画（令和3~7年度）」（令和3年3月文部科学大臣決定）において、老朽改善整備等が必要な教育研究施設の総面積を約470万㎡としており、それを整備するにあたり、51.7万㎡（11%）を競争的スペースの確保目標としていることから、本学もそれに準じた目標を掲げています。
- ※2 多様な人々の交流を促す「オープンイノベーションスペース」と学内外のステークホルダーに貸出する「インキュベーションルーム」などを共創の場と呼んでいます。

共用スペース

- ・全学・学部管理のスペース
- ・「共創の場」の他、更衣室やリフレッシュルームなどの共通利用するスペース

共創の場

全学管理スペース

オープンイノベーションスペース

- 学内外の多様なステークホルダーが利用可能
- ・コワーキングスペースとしての活用も想定
 - ・セミナー、ワークショップなどの開催
 - ・スタートアップエコシステムへの活用
 - ・多様なステークホルダーの交流の場

インキュベーションルーム

- 個室として専有して利用するレンタルラボの性格
- ・研究開発等のベンチャー企業の入居
 - ・本学と共同研究を行う企業などの入居
 - ・学内外の研究資金（戦略的な予算配分、科研費など）を活用した本学教員のプロジェクト実施のための入居
 - ・学部内プロジェクト等の実施のための入居

部局管理スペース

主に部局の特色を活かした共創の場

- ・部局主導のプロジェクトによる活用
- ・部局の教育研究を推進していくための利用
- ・部局内の交流の場

【参考】イノベーションスペースの位置付け

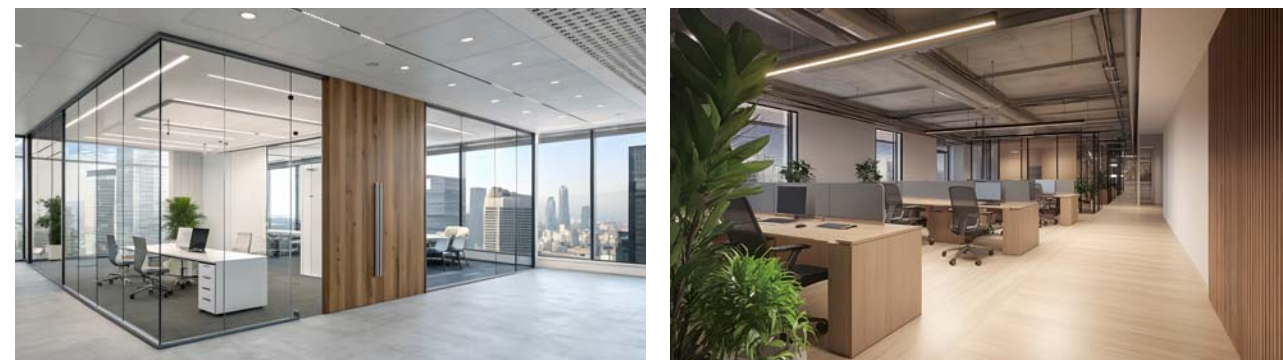
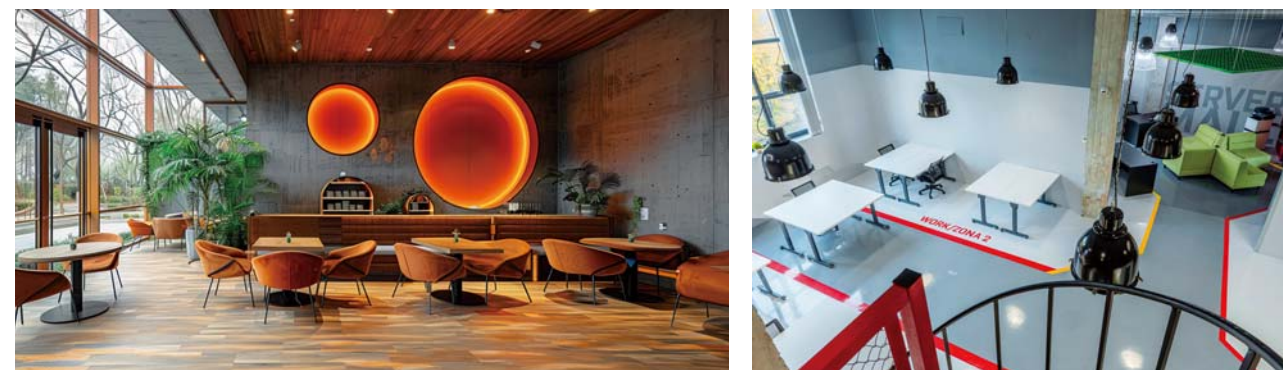
② 屋外パブリックスペース（南側）の整備

既存キャンパスにおいては、仕事、教育、研究といったある一定の目的を持った人がキャンパスを利用しており、その目的を果たすと一定時間の滞在の後に去ってしまいます。屋外パブリックスペースのように多様な目的で過ごすことができるスペースが共通教育棟と連続的に繋がることで、その周辺に人々が長く滞留し、そこから賑いや交流が生まれるということも考えられます。そのため、共通教育棟の再生と併行して、その周辺に屋外パブリックスペースを整備します。

■共創の場とは？

オープンイノベーションスペース

アクセスのしやすさや外部からの視認性を考慮して、基本的には各建物内の低層部分に快適で魅力的なコミュニケーションスペースを設置する、各建物の形状に併せて本スペースでの交流の様子が外部から視認されやすくなる工夫をする、改修デザインに合わせた什器類を選定するなど、多様な人々を引き付けるものとする事で、交流が活発化し偶発的な気づきや異分野融合等に繋がる可能性が広がります。



インキュベーションルーム

産学連携や競争的資金によるプロジェクトの実施など、オープンラボやスタートアップとしての使い方を想定したスペースをイメージしています。実験室はもちろん、さまざまな使われ方に対応できるよう、できるかぎりフレキシブルな設えとし、入居者側でカスタマイズして利用していただくことを考えています。

また、オープンイノベーションスペースと隣接して配置することで、多様な人々の交流を促すことができます。



屋外パブリックスペース

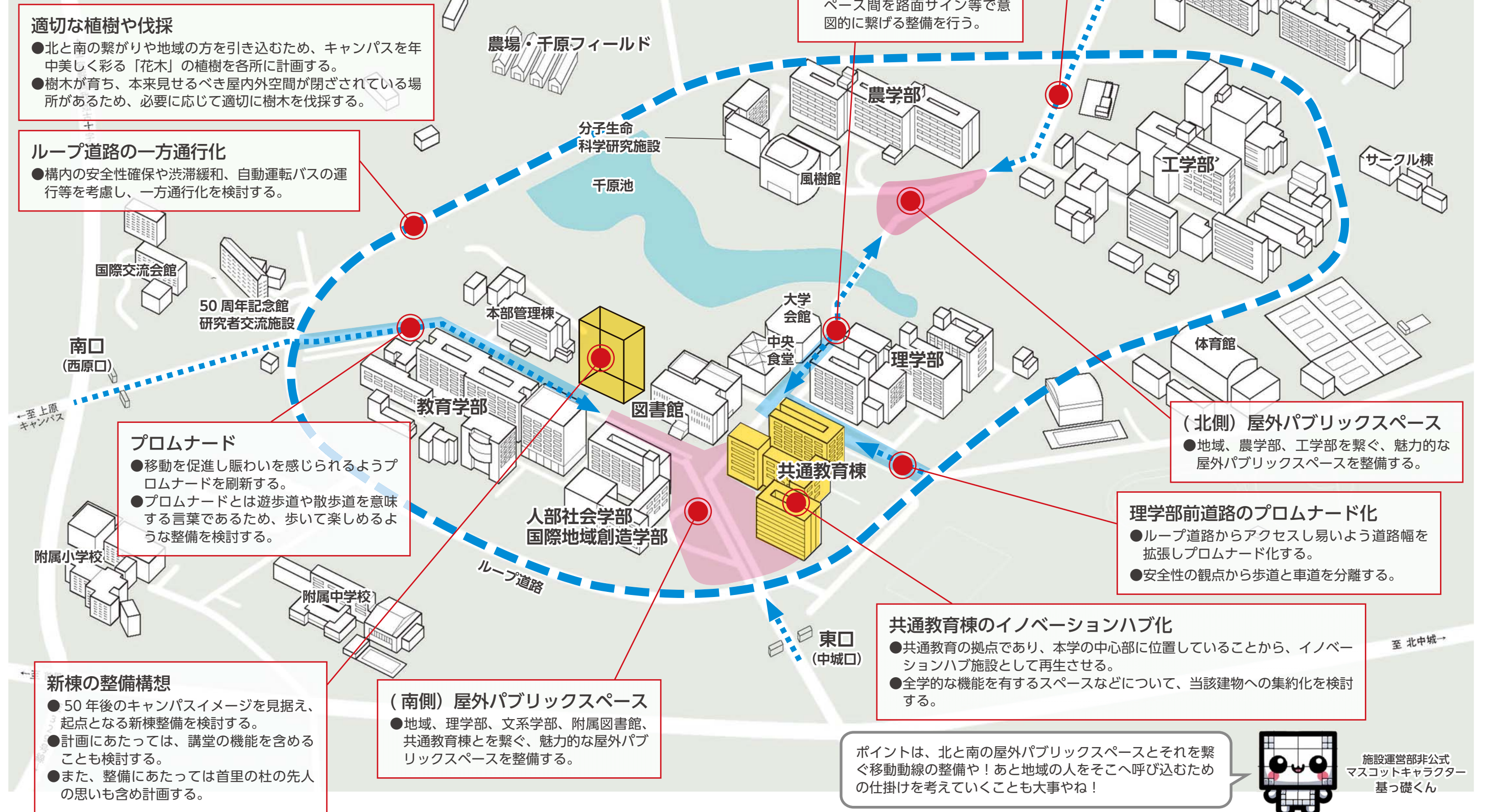
建物内に限らず屋外にも共創の場を配置することが重要です。屋外パブリックスペースはこうした建物外における共創の場として多様なステークホルダーの接点が生まれる場です。

ネットワーク環境で例えると共創拠点化のハブとなる施設とその他施設とを繋ぐネットワークケーブルのような役割を担っています。



■共将来計画（全体図）～人の流れをつくり、賑いや交流を生む～

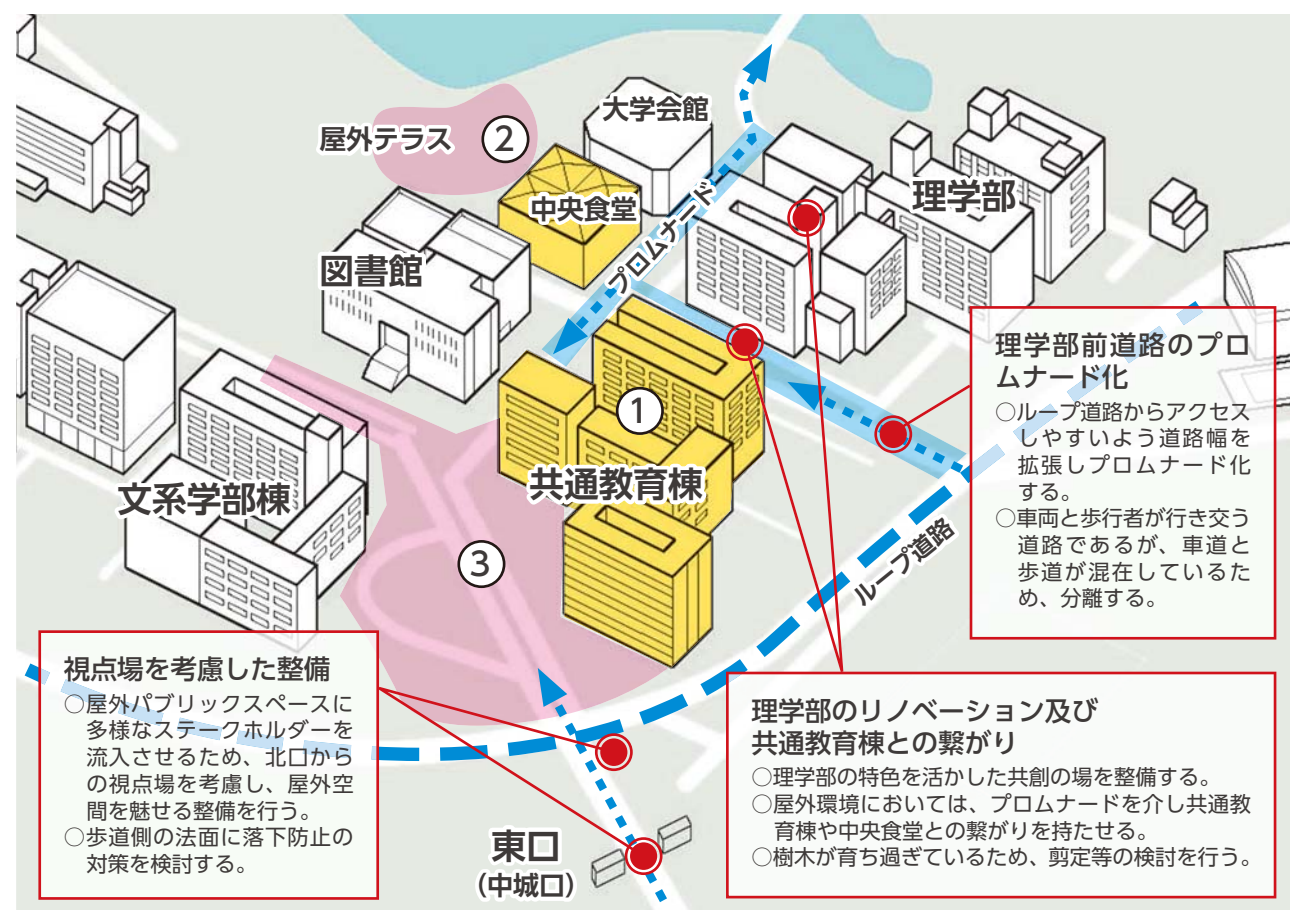
「■将来計画における重点取組事項」および「■共創拠点化に向けた具体的な取組」等を踏まえ、千原キャンパスにおける25年後（2050年）の将来計画を検討しました。25年後は多くの建物が築後65年を迎え、鉄骨造の建物や小規模建物、用途として不要となった建物を取り壊しとなる一方で、主要な建物はまだ取り壊しには至っていないと想定されます。こうした状況を踏まえ、キャンパスがどのように共創拠点化を実現していくか、50年後のビジョンに向けての移行、イノベーションハブ施設や新たな建物の整備構想などを盛り込んで計画しています。



■将来計画（理学部・共通教育棟・中央食堂・東口周辺）

当該エリアは、附属図書館や大学会館等が建ち並び本学の中心地であり、学生の活気溢れる場所となるため、**重点的に整備を行うエリア**とする。主な整備は以下のとおり。

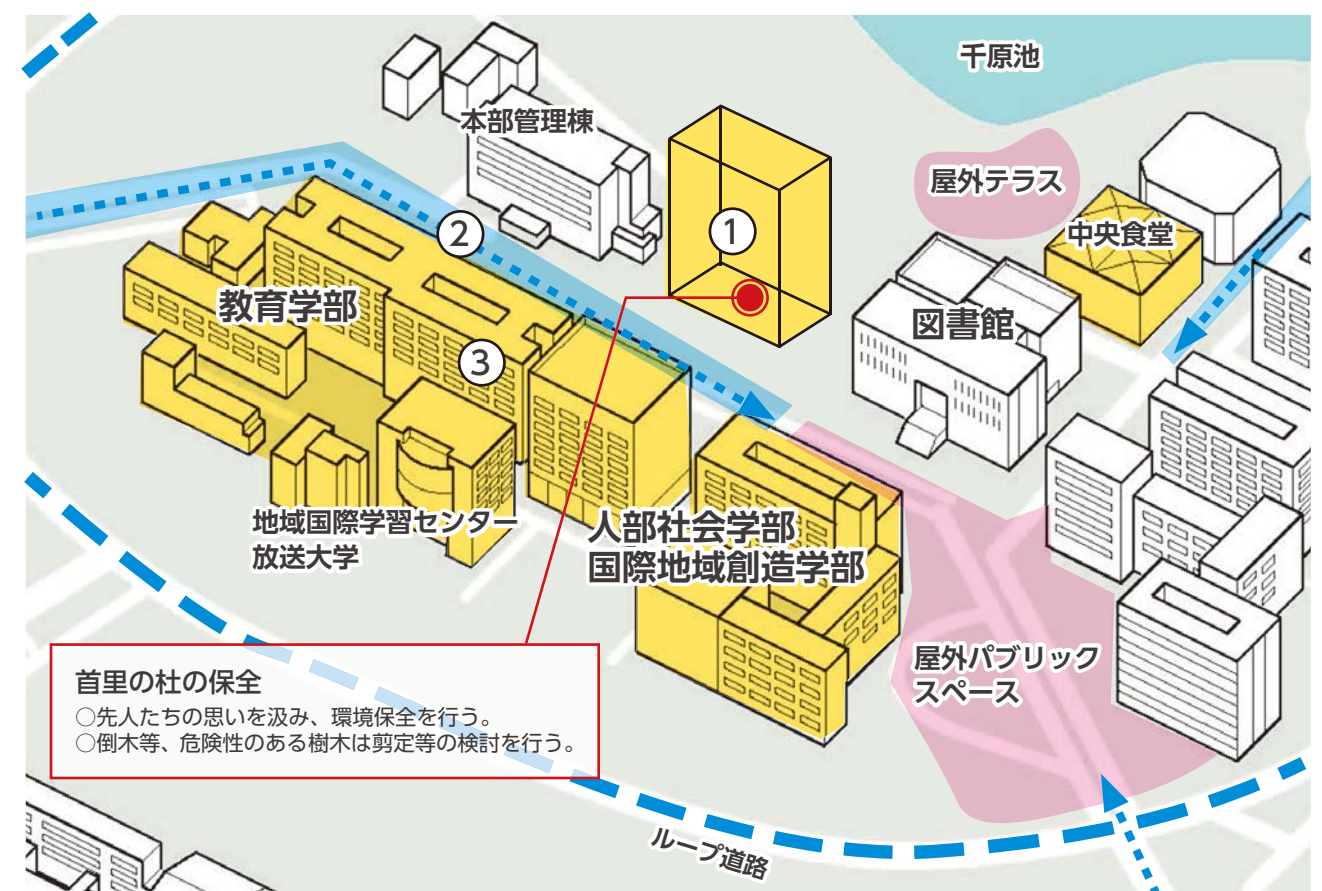
- 交流
- ① 共通教育棟のイノベーションハブ化
- 本学の象徴的な建物となるよう沖縄らしいデザイン性を持った施設整備を検討する。
 - 「交流が生まれにぎわいを感じるキャンパス」の実現に向けたイノベーションのハブ施設としてインキュベーションルームや講義室、事務室等のほか、それらを繋ぐオープンイノベーションスペースを確保する。
 - 多様なステークホルダーを呼び込むため、前例にとらわれず、自由な発想でスペースの使い方を検討する。
- 交流
- ② 中央食堂、屋外テラスのリノベーション
- 中央食堂は多くの学生が集まる場であるが、一部遊休となっているスペースがあることから、有効活用を目的としたリノベーションの検討を行う。
 - 中央食堂と連続性を持たせた屋外テラスの再整備を検討する。
- にぎわい
- ③ 屋外パブリックスペースの整備
- 理学部と文系学部、附属図書館、共通教育棟を繋ぐ沖縄らしい魅力的な屋外空間を整備する。
 - この屋外空間を通して、各建物内へと誘導する仕掛けを検討する。
 - シンボルとなるような「大きな花木」や「アート」等の整備を検討する。
 - キッチンカー等の乗り入れも想定し、蛇口やコンセント等の整備を検討する。



■将来計画（教育学部・文系総合研究棟・大学本部周辺）

当該エリアは、中心地に隣接する文系学部・大学本部エリアである。中心地との一体性を持つことや新たな動線の整備等で人の移動を促進する。主な整備は以下のとおり。

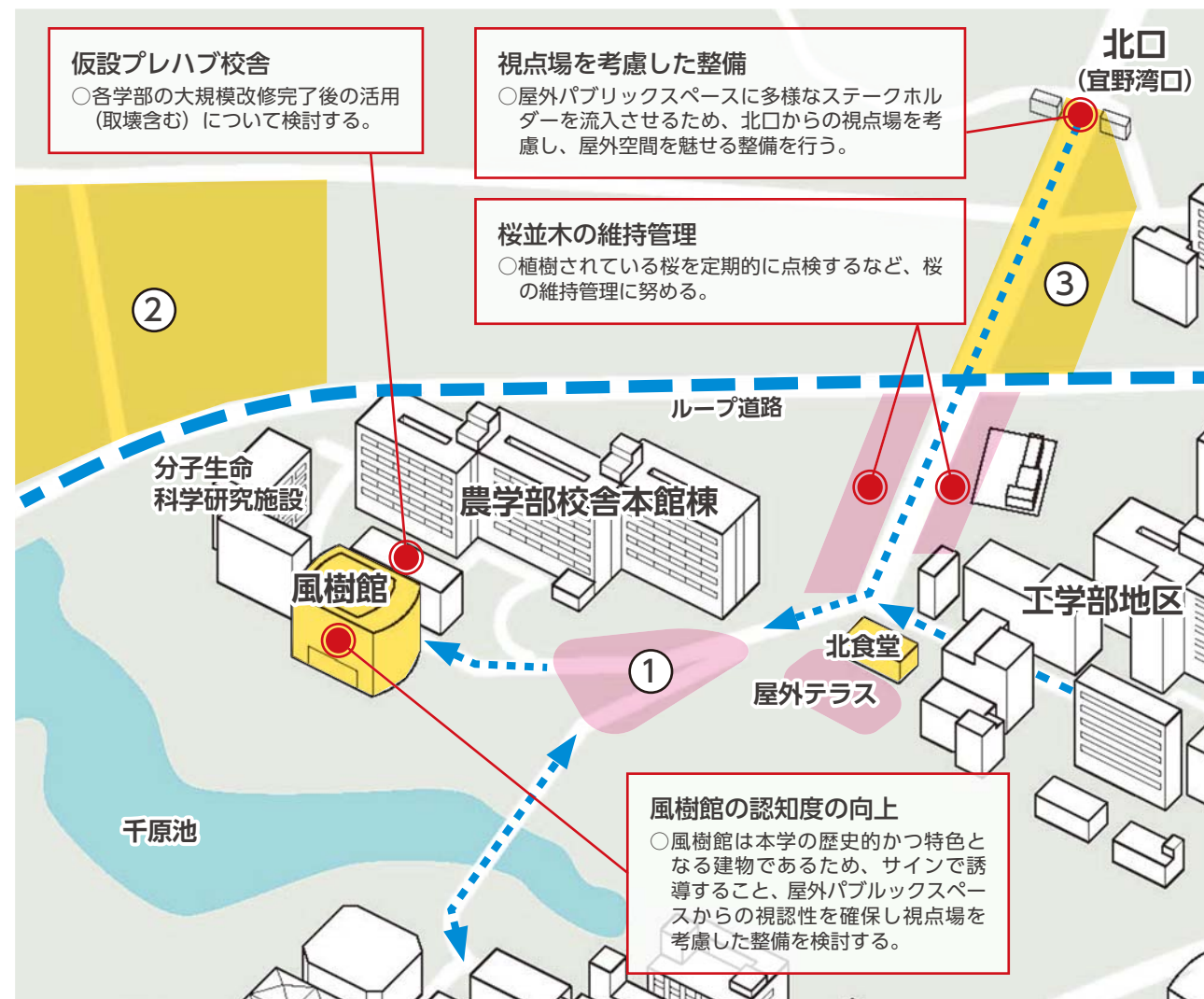
- にぎわい
- ① 新棟の整備構想
- 第1章 1-7 で描いている50年後のイメージ図を実現していくための起点として、新棟整備に向けた取組を推進していく。
 - 基本的に既存建物を取り壊す前提で新棟の整備構想を立案する。
 - 基本的に既存建物の規模を大幅に縮小していく前提で新棟の整備構想を立案する。
 - 首里の杜を整備した先人の思いを含め計画する。
 - 講堂の機能も含めることを検討する。
- 移動の促進
- ② プロムナードのリノベーション
- 文系学部、本部管理棟からプロムナードへの動線を刷新する。
 - 施設内にいても屋外のにぎわいを感じられるよう視認性に配慮した整備を行う。
 - 屋外パブリックスペースと一体性、連続性を持った整備を行う。
 - 散歩道として楽しめるように花木の並木道の整備を検討する。
- 交流
- ③ 文系学部のリノベーション
- 大規模改修等に併せ人文社会学部、国際地域創造学部、教育学部の特色を活かしたイノベーションスペースを整備する。
 - 屋外環境においては、屋外パブリックスペースやプロムナードと一体性を持った整備を行い、繋がりを持たせる。



■将来計画（農学部・フィールド・風樹館周辺）

当該エリアは、千原キャンパスの北側に位置し、付近に公共交通機関の乗り入れがあることから、構内では利便性が高いエリアである。主な整備は以下のとおり。

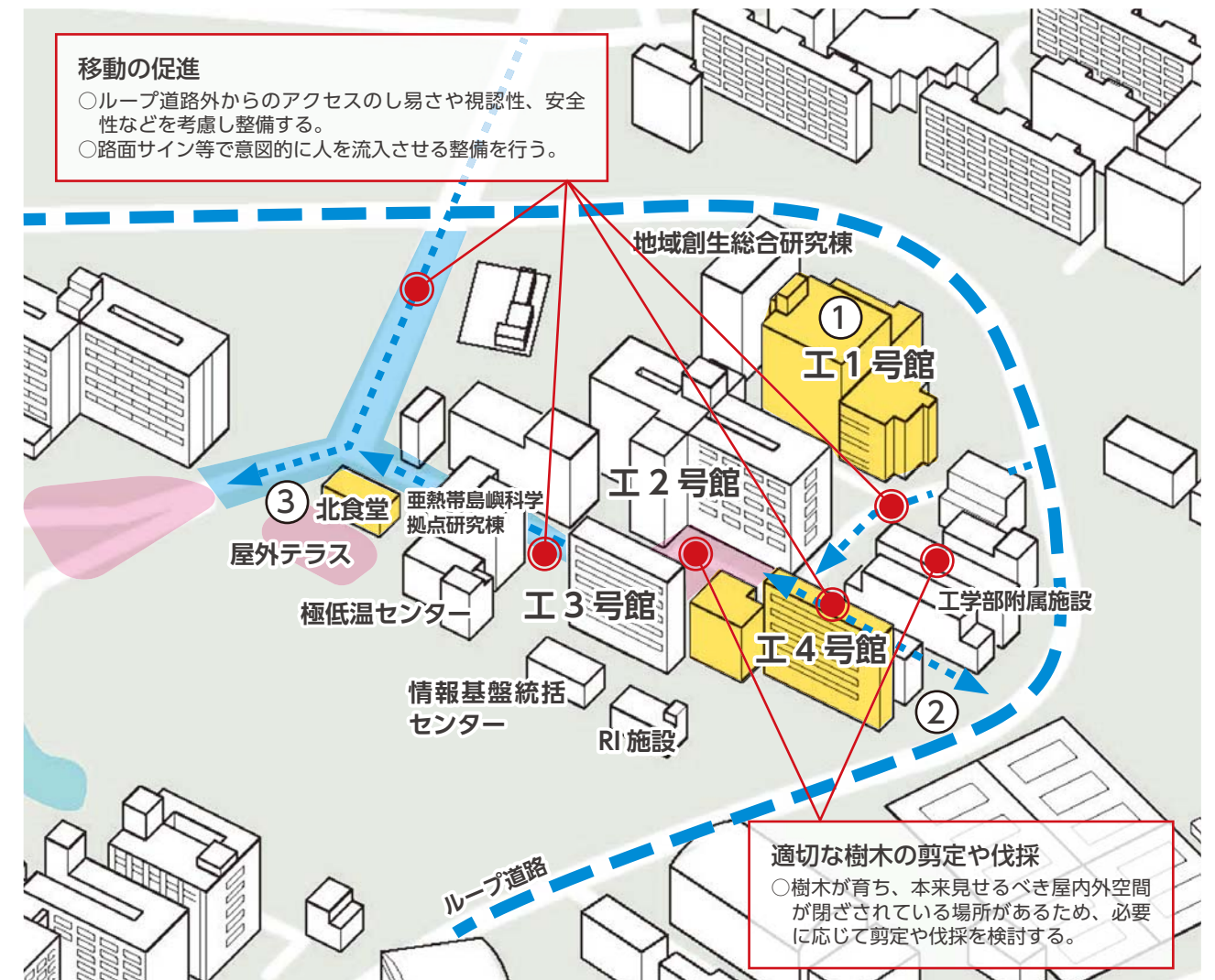
- ① 屋外パブリックスペースの整備
 - 地域、農学部、工学部理学部とを繋ぐ沖縄らしい魅力的な屋外空間を整備する。
 - この屋外空間を通して、風樹館や南側の屋外パブリックスペース、イノベーションハブへ誘導する仕掛けを検討する。
 - 南側の屋外パブリックスペースとは違った理系地区らしい魅力的な屋外空間を整備する。
- ② 分子生命科学研究施設およびフィールド施設のリノベーション
 - 全国共同利用、共同研究拠点としての研究活動が進められているため、その特色を活かした共創の場整備を検討する。
 - 動物実験室等の適正な管理を含めて検討する。
- ③ 北口の再開発
 - バスの乗入拡充による乗降者数の増加等を目的として北口の再開発を検討する。
 - 乗降者をループ道路の内側へ誘導する仕掛けを検討する。



■工学部周辺

当該エリアは、千原キャンパスの北側に位置し、農学部と隣り合わせにある、構内では利便性が高いエリアである。主な整備は以下のとおり。

- ① 工1・4号館のリノベーション
 - 大規模改修等に併せ工学部の特色を活かした共創の場の整備を行う。
 - 共創の場については、屋内外への活動の可視化を検討する。
- ② 新たな動線の整備
 - ループ道路から工学部地区へのアクセス性等を考慮し、新たな道路整備を検討する。
 - 北側のパブリックスペースや南側のキャンパスの中心に人の流れを促すため、路面サイン等の整備を行う。
- ③ 北食堂、屋外テラスのリノベーション
 - 南側の学生等呼び込むため、魅力的な空間としてリノベーションを行う。
 - 屋外テラスから千原池を望めるよう適切な剪定や伐採を行う。
 - 北食堂と連続性を持たせた屋外テラスを再整備する。



4章 施設マネジメント

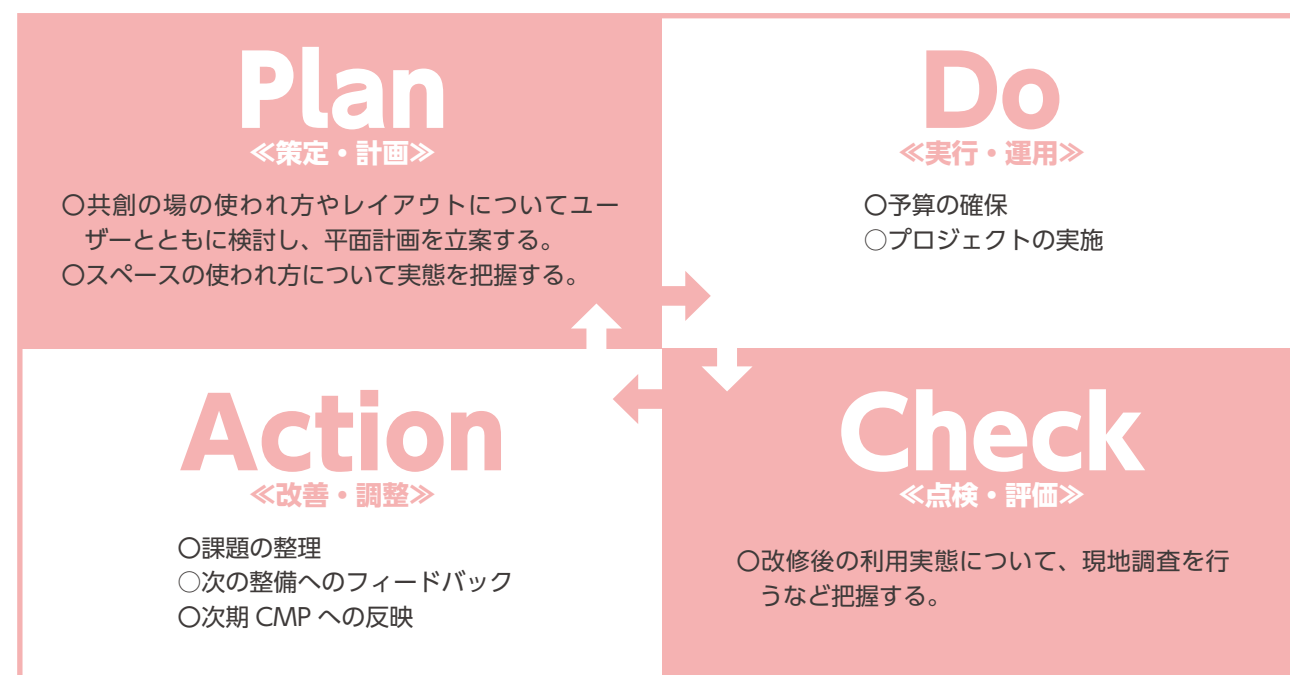
4-1 施設マネジメントの考え方

文部科学省の示す公表資料等を踏まえ、大学として施設マネジメントを実践する具体的な取り組みとして、以下3つの視点でPDCAサイクルを確立するものとします。



■スペース：活用度の低いスペースは、共創の場など大学としてより有効な使い方にシフトしていく。

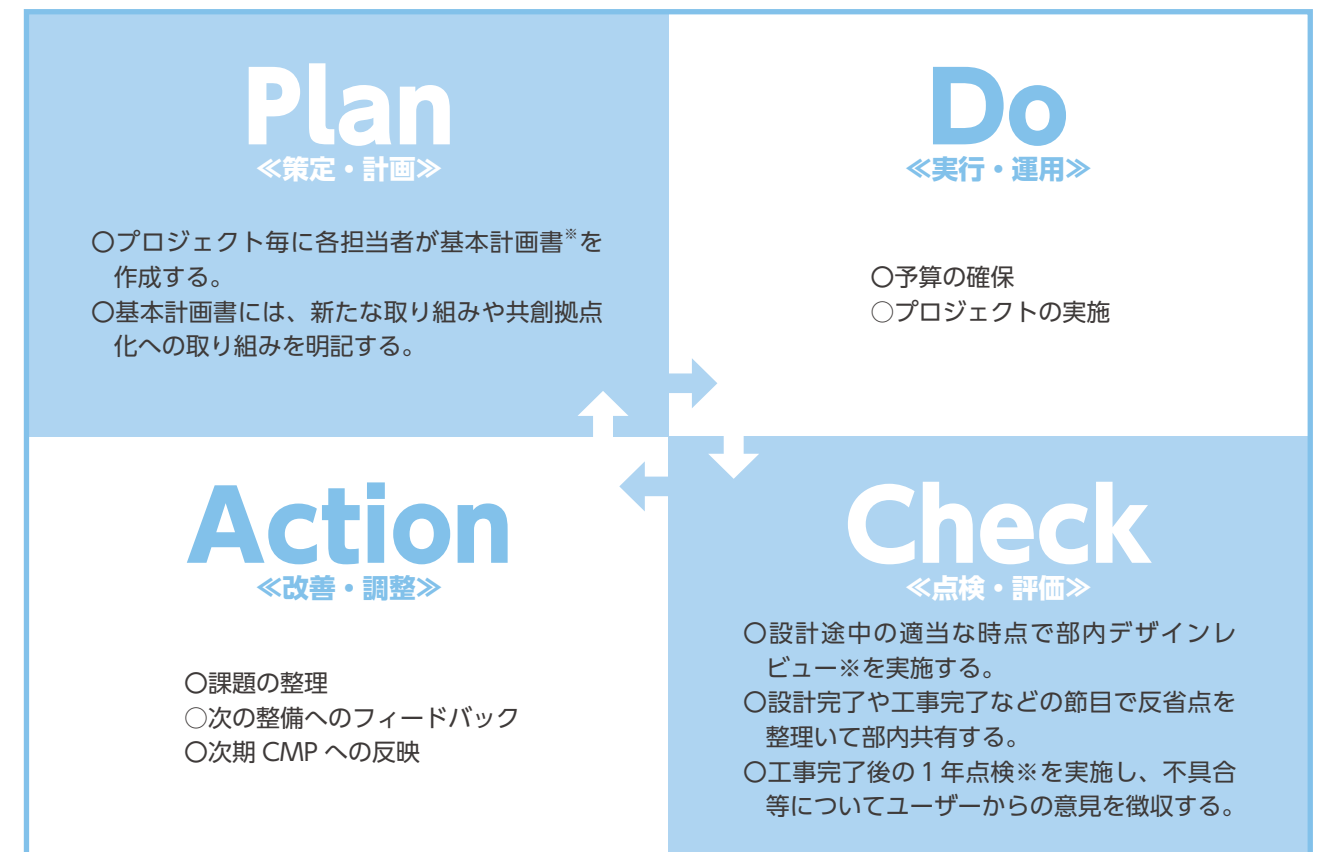
大学の所有する土地や建物は現にそれを利用している教職員のもではありません。大学の運営費交付金が年々減少していくことや、日本の少子高齢化などを考慮すると、今後の財政状況は厳しくなっていくことが予想されます。施設マネジメントの観点からは現に保有する資産を最大限有効活用していくことが求められます。適切なスペースの使われ方にしていくため下記のマネジメントを行っていきます。



【スペースマネジメントにおけるPDCAサイクル】

■クオリティ：大学として最適な施設整備の品質を検証し、それを基準とした施設整備を行う。

大学が行う活動を適切に実施していくためには、その舞台となる施設が必要な品質水準を満足していなければなりません。また、それは整備に必要なコストとのバランスも重要です。常にこういった品質を確保していくため、下記のマネジメントを行います。



【クオリティマネジメントにおけるPDCAサイクル】

※基本計画書：当該プロジェクトについて整備の基本的な考え方を建築工事、電気工事、機械工事それぞれについてまとめたもの。
(A4用紙1～2枚のものを想定)

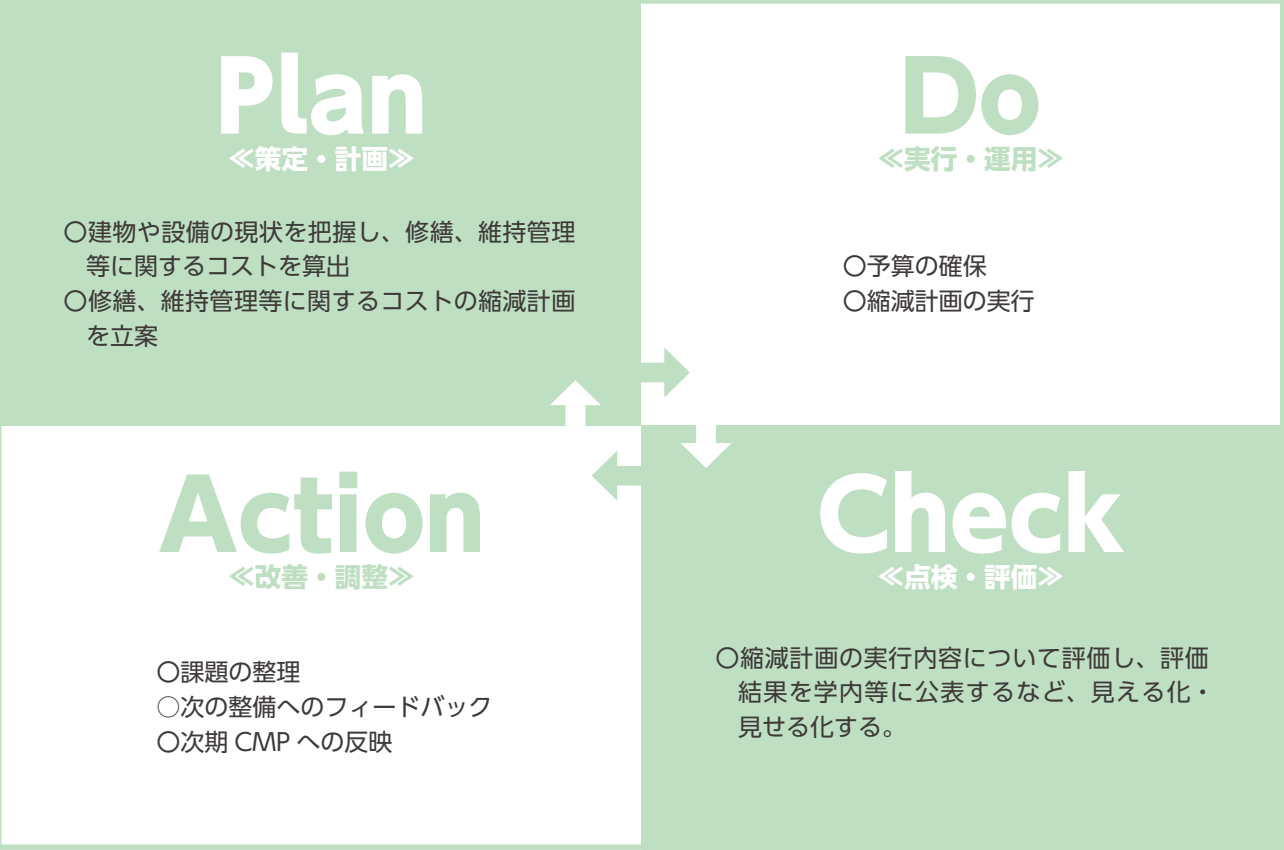
※デザインレビュー：設計途中の基本的な考え方や基本図等がまとまってきた段階で、これについて部内においてプレゼンテーションすること。部内構成員からのアドバイスを得るとともに、プロジェクトごとのクオリティのバラツキを防ぐことを目的として実施する。

※1年点検：工事竣工後1年が経過した段階で行う点検。現地の不具合点検、ユーザーからの工事に対する意見徴収など、実施した施設整備に対するフィードバックを得ることを目的として実施する。

■コスト：徹底して無駄を省き、これによって捻出した財源は真に必要な施設整備に充てる。
また、新たな補助金の獲得など、幅広い視野で多様な財源の確保に努める。

コストについては、まずはその使い方を把握することが重要です。施設運営部が行う施設整備全般において、どんな整備にどれだけの予算が使われているのか把握、分析し、例えば同様な内容の整備について一括発注するなど、どうすれば費用を削減できるか検討します。これらについて透明化し評価可能な状態にしていきます。

また、厳しい財政状況も踏まえ、文部科学省以外の補助金や実証実験、PFI 事業の活用など広い視野を持って情報収集を行い、多様な財源の確保に努めることも重要です。



【コストマネジメントにおける PDCA サイクル】

5 章 個別計画

本章においては、「第 3 章 3-3 将来計画 ～人の流れをつくり、にぎわいや交流を生む～」を踏まえ、具体的にどのような計画を策定又は改定し、実行していく必要があるのかということについて説明しています。

5-1 老朽改善計画

西普天間を除く本学キャンパスでは、移転等で一斉に建てられた建物が一斉に老朽化を迎えています。（図 1 参照）現在、大規模改修工事を建物の経年を考慮し順次実施しているところですが、別途定める個別施設計画によると、現状のペースで改修を実施した場合、一部では改修工事の実施がかなり先になってしまうことが想定されています。

このような実態も踏まえ、「財源の確保（施設に投じる予算の増加）」と「施設総量の最適化（施設に投じる予算の削減）」を基に具体策を考えていく必要があります。

財源の確保については、文部科学省より措置される施設整備費補助金のみならず、他省庁の補助金や学内予算なども視野に財源確保に努めていくことが重要です。

施設総量の最適化については、今後の人口減少を見据え、現在保有している施設についても優先度を仕分け（トリアージ）し、メリハリをつけた施設整備を計画していくとともに、さらに一歩踏み込んだ考え方として、優先度が低い建物にある機能を一つの建物に集約化していくなども考えられます。

これら具体策を計画し実行していくことで、安全安心という基盤が構築され、その上に「交流が生まれ、にぎわいを感じるキャンパス」が実現できるものと考えています。

団地名	土地面積 m ²	棟数	建物延床面積 m ²	要整備面積 m ² (経年 40 年以上)	老朽化率
千 原	1,032,665	165	193,357	78,292	40%
石 嶺	20,935	8	6,372	4,734	74%
与 那	8,917	7	1,679	812	48%
奥	107,352	5	612	201	33%
西 表	1,989,792	15	3,213	420	13%
瀬 底	25,734	16	5,527	168	3%
船 浦	3,953	4	342	296	87%
志真志	20,385	9	10,476	10,476	100%
前 田	6,674	3	25,825	0	0%
合計（平均）	3,441,523	232	227,403	95,399	44%

【参考】各団地の老朽化率（図 1）】

5-2 インフラ整備計画

インフラについても建物と同様に同一時期に老朽化を迎えています。図 2 のとおり、屋外給水管や屋外電力線等については施設整備費補助金等により老朽化改善が実施されている一方で、屋外ガス管や屋外排水管、屋外通信線（電話・防災等）等の老朽化率が著しいことから、これらについても改善していく必要があります。

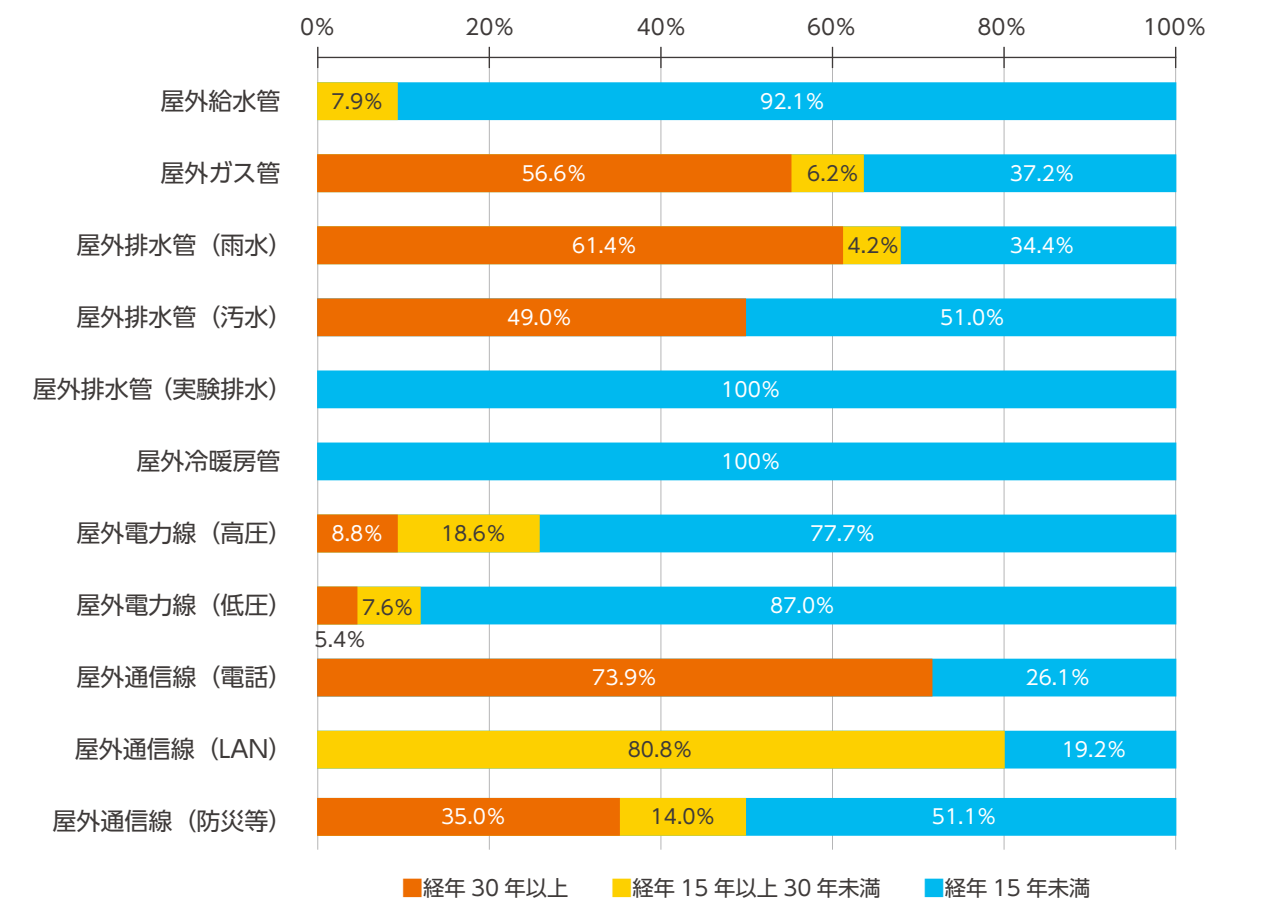
そのため、老朽改善計画と同様に「財源の確保（インフラに投じる予算の増加）」と「施設総量の最適化（インフラに投じる予算の削減）」のほか、「事後保全から予防保全への転換（インフラに投じる予算の削減）」を基に具体策を考えていく必要があります。

財源の確保については、これまでと同様に文部科学省による施設整備費補助金を基本とし、必要に応じて学内予算を投じていくことも考えていく必要があります。

施設総量の最適化については、今後の人口減少を見据え、現在保有している施設についても優先度を仕分け（トリアージ）し、メリハリをつけた施設整備を計画していくとともに、さらに一步踏み込んだ考え方として、優先度が低い建物にある機能を一つの建物に集約化していくなども考えられます。

「事後保全」から「予防保全」への転換については、国土交通省における「国土交通省所管分野における社会資本の将来の維持管理・更新費の推計（平成 30 年 11 月 30 日）」によると、「事後保全」の考え方を基本とした今後 30 年間の維持管理・更新費の試算と「予防保全」の考え方を基本とする試算とで比較したところ、「予防保全」の方が維持管理・更新費が約 30% 減少する結果となったことが報告されています。そのため、これまでの「事後保全」による維持管理から計画的に実態状況把握点検を実施したうえで、「予防保全」による効率的・経済的なインフラ整備計画を検討し策定していく必要があります。

基幹整備 整備率【千原団地】（令和 7 年度現在）



【参考】基幹設備（ライフライン）老朽化率（図 2）

5-3 省エネ計画

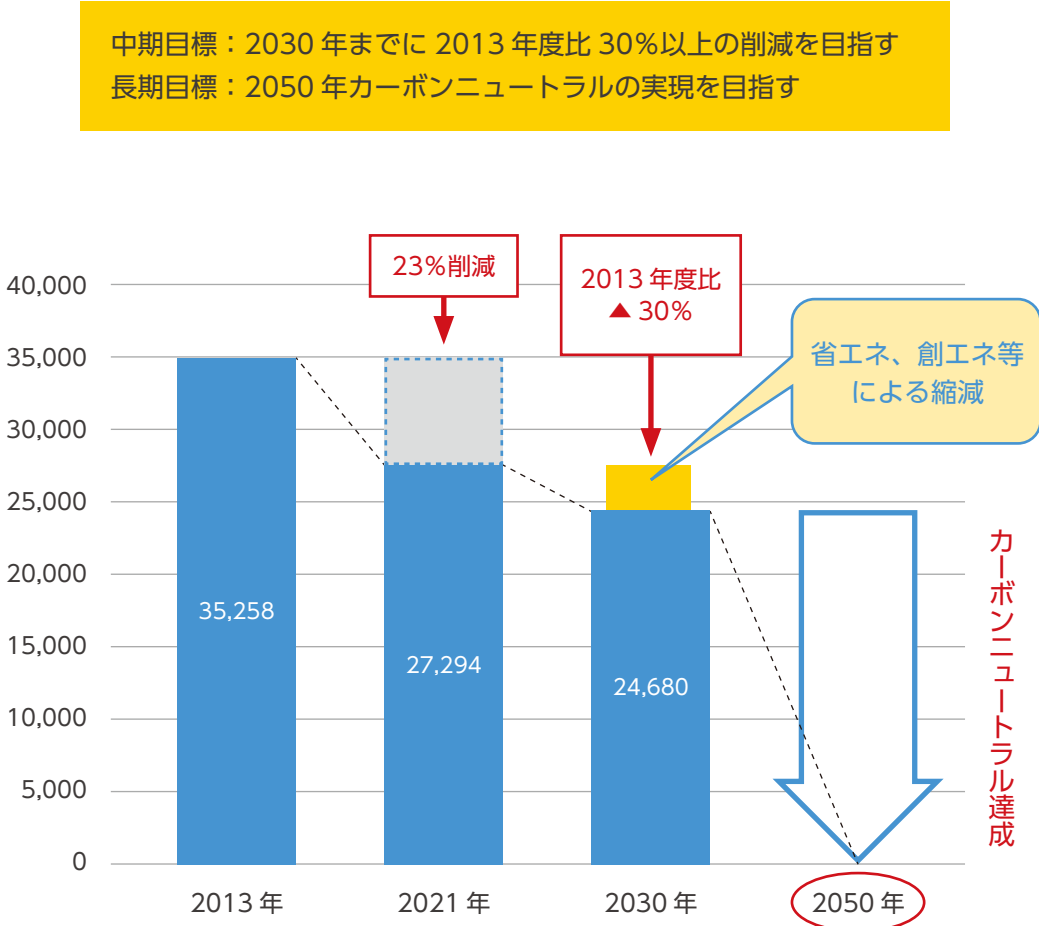
3 章でも触れていますが、本学は 2050 年カーボンニュートラル実現に向け、カーボンニュートラル実施計画（令和 4 年 2 月）を策定しました。図 3 のとおり、中期目標として 2030 年までに 2013 年度比 30% 以上の削減を目指しており、長期目標は 2050 年カーボンニュートラルの実現を目指すこととしています。

2030 年までの中期目標においては、大規模改修や省エネ改修などを含む「省エネルギー年次計画」が示されていますが、2050 年における長期目標の達成には、「更なる省エネ改修の財源確保（エネルギーをへらす）」や「再生可能エネルギー設備の導入（エネルギーをつくる）」に取り組んでいく必要があります。

また、省エネ改修の財源確保については、文部科学省における施設整備費補助金のみならず、他省庁で所掌する省エネ関連補助金などの外部資金を活用し、学内予算における投資額を削減していくことも重要です。

再生可能エネルギー設備の導入については、電力会社における「配電系統アクセルルール」において、キャンパス内に設置できる設備容量に制限（300kW）があり、今後対応を考えていく必要があります。さらに PPA 等を活用した設備導入などを戦略的に計画していくことも考えられます。

今後、これらの改善策や具体策などについて検討し、長期目標である 2050 年のカーボンニュートラルの実現に向けたロードマップを作成していく必要があります。



【参考】琉球大学カーボンニュートラル実施計画より（令和 6 年 2 月 SDGs 推進室）（図 3）

5-4 交通計画

現在の千原キャンパスは敷地が広大かつ、千原池を中心に北側と南側で分断（下図参照）されていることから、同一キャンパスであるにも関わらず、「北側に行ったことがない」などの声も聞こえてきます。

そのため、キャンパスの共創拠点化にあたっては、人を動かすことを考えていく必要があります。その手段として交通は重要な役割を担っています。例えば、複数の交通手段を結び、交通を通してキャンパス内外に繋がりをを持たせる「モビリティポート」の設置も考えられます。

モビリティポートに繋がる構内交通手段として、他大学でも運行事例のある自動運転バスでループ道路を周回し、構内に分散している学部間に繋がりをを持たせることで、構内で人の移動を促すことができます。また、ループ道路の内側では、歩行者に配慮しつつ、散策するような感覚で安全に移動できる乗り物を模索していくことも考えられます。

なお、構内の交通インフラ整備等にあたっては、SDGs に配慮しエコな材料を使用することや自転車専用レーンの確保、太陽光発電を利用した電動アシスト自転車の設置など、「持続可能な世界」の一助となる取組を計画に反映させていくことも重要です。さらに、車による通勤通学を減らす取り組みを推進していくことで、沖縄県における慢性的な渋滞問題への解決にも寄与し、延いては地域貢献に繋がっていくものと考えています。

ただし、それらを検討していくにあたり、予算確保が大きな課題となることから、教職員、企業等と協働し、実証の場としてキャンパスを利用することや、地域、企業等と協働し国の補助金を活用していくことなども考えていく必要があります。

そのため、今後、共創拠点化等に向けた交通計画を策定するとともに、計画を実現していくための検討体制の構築なども視野に取り組みを推進していくことが重要です。



【参考 _ 構内交通の考え方 (図4)】

例えば、青点線を構内交通動線とし各学部付近に停車駅を設置、自動運転バス等を運行させることで各学部を繋げることも考えられます。

5-5 デザイン計画

交流を生み、にぎわいを感じられるキャンパスとしていくためには、人を惹きつけ、居心地が良くずっといたいと思われるようキャンパスを計画していく必要があります。日本学術会議 土木工学・建築学委員会 知的創造と活動を喚起する環境としての大学等キャンパスに関する検討分科会における提言（我が国の大学等キャンパスデザインとその整備システムの改善にむけて（平成 29 年 9 月 29 日））において、「大学等キャンパスは学生・教職員にとって学習・研究・教育の場として魅力的な場でなければならないことは自明である。美しく、魅力的で、かつ優れた機能を持つ研究・教育 キャンパスは優れた学生を多く集める。大学の魅力は人であり、伝統であることは事実であるが、そこで学びたい、研究したいと思わせる動機として、大学キャンパスの空間そのものの魅力がある。」と作成の背景で述べられています。

本学はこれまで「キャンパス・リファイン計画」や「外灯整備計画」、「緑地管理計画」等において、キャンパスの機能を強化・維持していくことに重点を置いて整備を実施してきたことから、デザインにおける計画は「キャンパスサイン基本計画書」のみとなっています。

そのため、今後は老朽改善や機能強化と併せてキャンパスのデザインマネジメントにも重点を置いて整備をしていく必要があります。

将来計画をもとに魅力的なキャンパス空間を構築していくためには、建物内のみならず、建物の外壁や外構、屋外環境における緑化、外灯、サイン、道路などを一体的にマネジメントするデザイン計画の策定が必要です。



【参考 _ 魅力的な屋外空間】

5-6 ユニバーサルデザイン計画

本学のキャンパスについては、平成 18 年～ 20 年にかけて大規模なバリアフリー対策工事を行い、各学部における主要建物の対策を講じてきたところです。それ以降は、学内において要望照会を行い、対応する必要がある場合は適時整備を実施してきました。

しかし、時代の変化とともに、バリアフリーの考え方も変化しています。もともとは建築用語として建物や道路など物理的なバリア（障壁）を除去していくという考え方でしたが、現在では身体障がい者や高齢者だけではなく、あらゆる方の社会への参加を困難にしているバリア（障壁）を除去していくという考え方に変化しています。

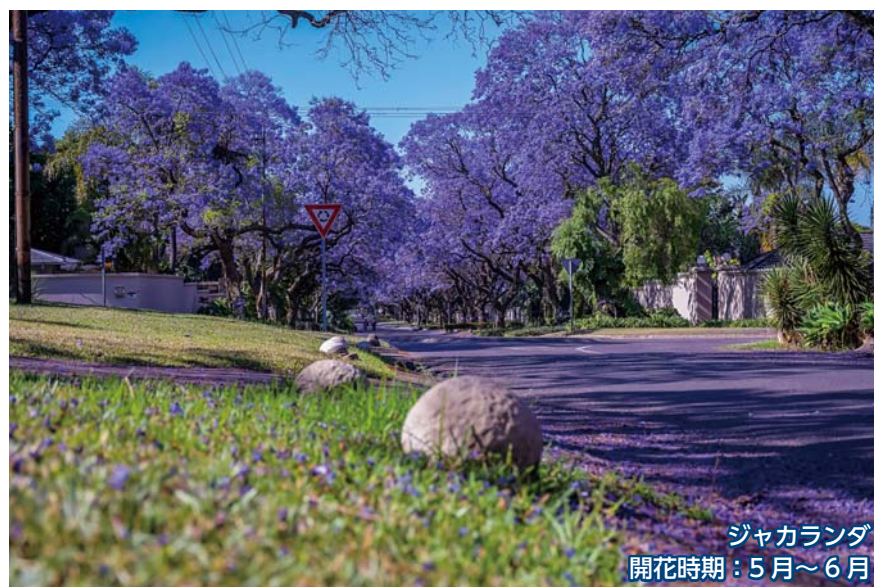
多様なステークホルダーが利用し、共創拠点化を実現していくためには、年齢、性別、文化、身体状況など、人々が持つ様々な個性や違いに関わらず、誰もが利用しやすい施設整備を実施していくことが重要です。

これらを踏まえ、別途「ユニバーサルデザイン計画」を策定し、時代の変化に応じた施設、屋外環境整備を計画的に実施していく必要があります。

5-7 緑化計画

首里キャンパスから千原キャンパスへの移転が昭和 54 年より開始され、昭和 59 年に本学キャンパスの移転が完了しました。その後、キャンパスの緑化計画が策定され、平成 15 年度に完成期を迎えたことから、それらを維持していく目的でその年に緑地管理計画を策定しました。これまで計画に則り維持管理に努めてきましたが、キャンパスに多様なステークホルダーを引き込んでいくためには、緑樹を維持管理していくだけでなく、シンボリックな「花木」を各所に植樹し、年間を通して様々な「花木」が咲き誇るようなキャンパスとしていくことも考えられます。

そのため、今後は「交流が生まれ、にぎわいを感じるキャンパス」の実現に向け、緑地管理計画の改定等を検討し、花木や緑樹の魅力をとおして、多くの方が大学を訪れ、繋がりが生まれるような整備を進めていくことが重要です。



ジャカランダ
開花時期：5月～6月



トックリキワタ
開花時期：9月～12月

【参考 _ 花木が咲く屋外空間】

5-8 サイン計画

平成 22 年に「琉球大学キャンパスサイン基本計画」を策定し、デザインや案内表示はそれに則り整備を進めてきました。

しかしながら、キャンパスが広大なうえ、様々な建物があることからサインを見ても建物の位置や判別がしづらいといったことや駐車場も番号等による管理が行われていないため、来訪者に対して説明が難しいという意見がありました。

そのため、車両や歩行動線における視点場を考慮し、建物名を認識できるよう配慮することや各駐車場に管理番号サインを設置するなど、「琉球大学キャンパスサイン基本計画」の改定も視野に検討していくことが必要です。

5-9 事業継続計画（BCP）

BCP 計画とは、自然災害等の緊急事態が発生した場合において、中核となる事業の継続又は復旧を可能とするために、平常時に行うべき活動や緊急時における事業継続・復旧のための方法などを予め取り決めておく計画のことです。

地域における教育研究拠点として安全・安心なキャンパス環境を確保するためハード面の整備のみでなく、ソフト面の整備として運用面の体制づくりを推進します。また、大規模災害時には施設・設備等の被害状況の把握及びライフラインの確保が重要とされ、実施計画として「事業継続計画（BCP）施設編」を個別策定する必要があります。また、実際に災害が発生した際にスムーズに機能するよう平時に訓練しておくことも重要です。

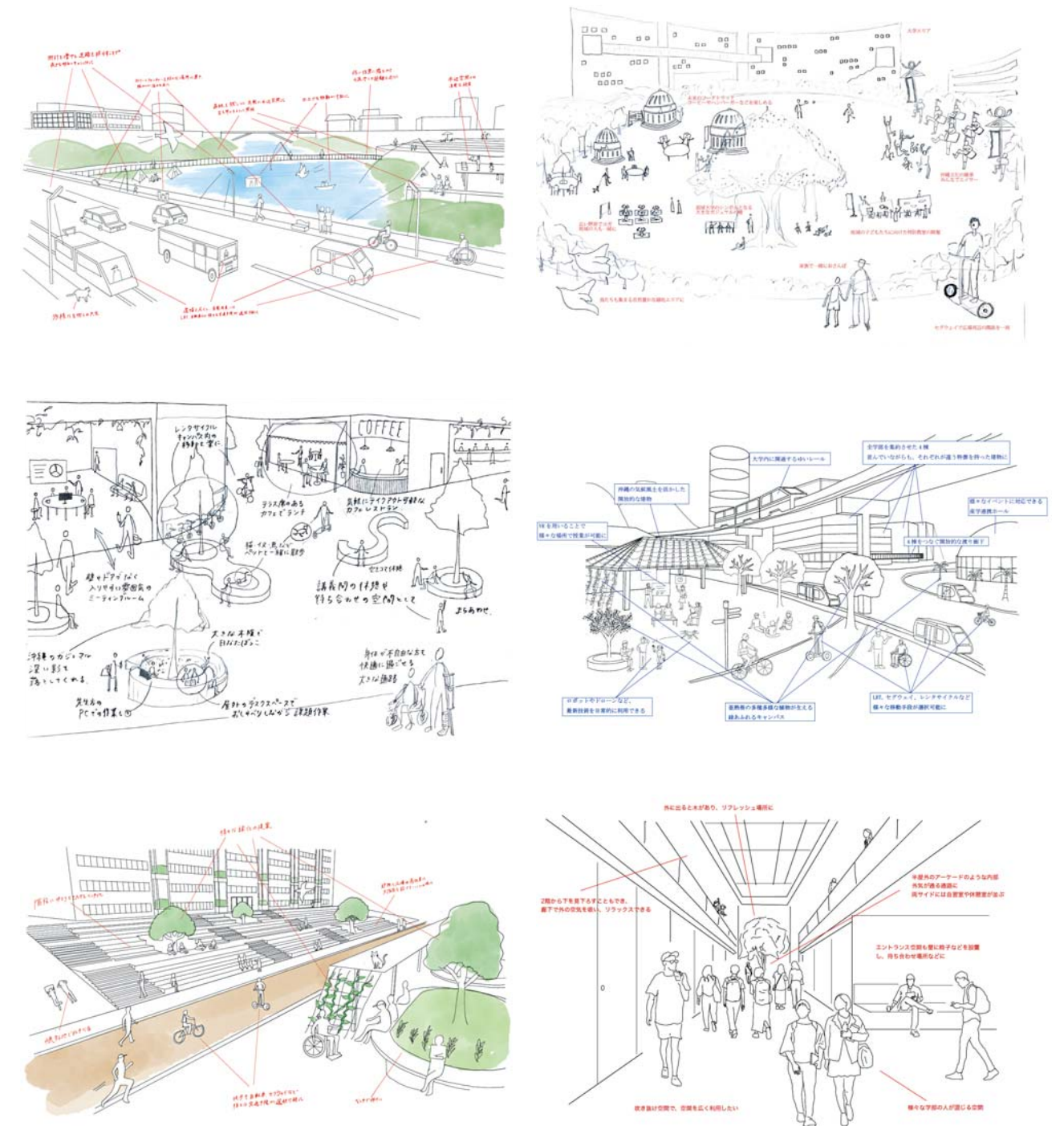
参 考

■キャンパスマスタープラン 2025Ver1.0 の策定経緯

令和4年12月14日	第1回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 1月 6日	第2回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 1月13日	第3回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 1月19日	第4回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 2月10日	第5回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 4月28日	第6回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 5月19日	第7回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 6月30日	第8回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 7月13日	第9回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年 7月27日	第10回施設運営部 CMP 検討チーム会議
令和5年10月 3日	学長ヒアリング
令和5年10月18日	役員連絡会への報告（CMP の改定及び方向性について）
令和5年10月31日	企画・研究担当理事ヒアリング
令和5年11月 6日	副理事（RX 琉大トランスフォーメーション担当）ヒアリング
令和5年11月 6日	教育・学生支援・国際交流担当理事ヒアリング
令和5年11月 7日	副理事（理域連携担当）ヒアリング
令和5年11月 8日	特命事項担当理事ヒアリング
令和5年11月 9日	副理事（評価・IR 担当）ヒアリング
令和5年11月10日	学長補佐（教育担当）ヒアリング
令和5年11月22日	病院・上原及び西普天間キャンパス・キャンパス移転担当理事ヒアリング
令和5年11月29日	副理事（ダイバーシティ担当）ヒアリング
令和6年 1月19日	学長ヒアリング
令和6年 2月28日	commons形成推進室の設置
令和6年 3月26日	commons形成推進室キックオフ会議
令和6年 3月29日	令和5年度第5回環境・施設マネジメント委員会への報告 （キャンパスマスタープランの中間まとめについて）
令和6年 8月28日	工学部教授会への説明
令和6年 9月 3日	国際地域創造学部教授会への説明
令和6年 9月18日	法務研究科委員会への説明
令和6年 9月19日	熱帯生物圏研究センターへの説明
令和6年 9月25日	教育学部教授会への説明
令和6年10月 8日	教育・学生支援・国際交流担当理事への説明
令和6年10月11日	企画・研究担当理事への説明
令和6年10月15日	総務・財務担当理事への説明
令和6年10月16日	理学部教授会への説明
令和6年11月 1日	病院・上原及び西普天間キャンパス・キャンパス移転担当理事への説明
令和6年11月 7日	特命事項担当理事への説明
令和6年11月27日	人文社会学部教授会への説明
令和6年11月27日	農学部教授会への説明
令和6年11月29日	地域貢献・施設担当理事への説明
令和6年12月 4日	学長への説明
令和6年12月23日	令和6年度第1回commons形成推進室会議
令和7年 3月 4日	令和6年度第5回環境・施設マネジメント委員会 承認
令和7年 3月11日	令和6年度企画経営戦略会議 報告
令和7年 3月18日	令和6年度教育研究評議会 報告
令和7年 3月19日	令和6年度役員会 承認

■千原キャンパスの 50 年後イメージ作図までの検討経緯

50 年後のキャンパスのイメージ図については、理工学研究科の学生にご協力いただき作図を進めてきましたので、これまでのスケッチ図を掲載いたします。



CAMPUS MASTER PLAN 2025



古紙パルプ配合率60%再生紙を使用

